

会津塾

2025 in 会津美里

合併20周年記念

報告書



11/1(土)13:15~17:30

会場：じげんホール

（会津美里町複合文化施設）

写真：会津美里町からみた磐梯山

一般社団法人

会津地域文化藝術フォーラム

2026年3月

目 次

	頁
<挨拶>	
主 催 者 (一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム 代表理事 高野 武彦) —	1
来 賓 (会津美里町 町長 杉山 純一様 > -----	3
<基調講演>	
パネルディスカッション 「地域おこし協力隊がみる会津美里と会津の魅力と未来」 -----	4
<分科会>	
◆第1分科会 (テーマ：地域の文化芸術) 「会津美里町と会津の民俗芸能」 -----	34
◆第2分科会 (テーマ：地域づくり) ～福島大学「第11回ふくしま地域政策研究会」とのコラボ企画～ 「人口減少下だからこそ挑戦する会津美里と会津の住民自治」 ～会津美里町の住民自治の過去・現在・未来～ -----	52
<交流会> -----	74
<特別企画>	
会津の県公式イメージポスター「来て。」集結 -----	75
会津17市町村の観光パンフ勢ぞろい -----	76
新しい地域資源開発 福島県立博物館とのコラボ「小彼岸桜のはちみつ」 -----	77
<マスコミ報道>	
新聞記事等 -----	78
<ご支援・ご協力をいただいている皆様>	
各自治体・企業・団体の皆さん -----	80

当日の会津塾来場者数 110名

会津塾2025 in 会津美里 (会津美里町合併20周年記念)

主催：一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム

日時：令和7年11月1日(土) 13:15~17:30

会場：じげんホール(会津美里町)

◆ 主催者挨拶

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム 代表理事

(国立大学法人 福島大学 行政政策学類 客員教授) 高野 武彦



皆さんこんにちは。

会津地域文化藝術フォーラムで代表理事をしております高野と申します。本日はお休みのところ皆さまお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。また、杉山町長にもご臨席いただき、誠にありがとうございます。

私ども会津地域文化藝術フォーラムは、まだ設立して2年目の若い団体でございますが、本日こうして会津美里町合併20周年を記念して開催できますこと、大変嬉しく思っております。

と、大変嬉しく思っております。

昨年、第1回目の会津塾は、会津若松市にあります福島県立博物館でやらせていただきました。その時は、会津の地域の宝である「お酒」にフォーカスしながら、今日もテーマといたしますが、現在の喫緊の課題であります人口減少問題に焦点をあてて、人口減少下の地域づくりをどうしたらいいか、まず、会津若松市で考えてみようということを行いました。その他には、映画というコンテンツを活かした地域づくりについてもテーマとして会場の皆さんと共に考えていきました。

今年は、この会津美里町で行うに当たり、まずは地域おこし協力隊の皆さんにスポットを当ててみたいと思っております。地域おこし協力隊の皆さんが町外からいらっしゃって、もうすでに会津美里町は10年の歴史になりますけれども、その間、多くの方々が活躍しております。皆さん、地域おこし協力隊の方々の活躍の内容はよくご存知かと思うんですけども、地域おこし協力隊の皆さんが、この会津で活躍して何を思い、どう感じているのか、そして未来に対してどんな思いを持っていらっしゃるのか、そういったことを発言する機会はなかなかありません。そういったところに今日は視点を当てて、まず基調講演として探っていきたいと思っております。

その後、分科会に別れたいと思います。まず第1分科会は民族芸能に焦点を当てたいと思います。

元県立博物館館長の赤坂憲雄先生は「なつかしい未来」というお話をいたします。私たちは過去にも責任を持たなければなりません。その過去を未来につないでいく責務もあります。また会津には、台湾をはじめ外国からの旅行者も増えました。その外国から会津にいらっしゃった皆さんに、一度尋ねたこともあります。皆さん、「どこかこの会津って懐かしい所って感じるんです」とおっしゃるんです。その時私は、赤坂先生の言う「なつかしい未来」という言葉の一つの意味を理解できたような気がしました。私たちの先人が築いた歴史、文化、特に民族芸能を、どう未来につないでいくのか、県立博物館や高校の校長先生としてもご活躍された懸田先生、そして郷土資料館の梶原館長さん、そして大里主任学芸員、そして私ども会津文藝の川延コーディネーターが皆さんとともに「なつかしい未来」をどう創造していくのか、そういったことなども含めて第1分科会の方を進めていきたいと思います。

第2分科会の方でございますけれども、福島大学のご協力もいただきまして、人口減少下の地域づくりについて考えていきます。福島大学とのコラボは今回が初めてです。県立博物館の渡邊学芸員から、まず江戸時代の高田村の農民と会津藩の関係のご報告をいただくことになっております。続いて今や我が国の住民論の権威とも言われております、会津美里町健康福祉課長の渡部朋宏さんから令和の時代の住民についてお話をいただきたいと思います。キーワードは「関係性」になってくるかなと思います。詳しくは第2分科会の方で議論していきたいと思います。令和時代の地域づくりについて、会場の皆さんと今後の住民自治をどうしていくかということも議論したいと思います。

最後に、講師の皆さんを囲んでワンコイン500円で交流会をしたいとも思っております。

約4時間のイベントになりますけれども、皆様よろしく願いいたします。ワンコインの方の交流会に参加ご希望の方、まだ受け付けておりますので、この基調講演が終わった後に、受付のほうに申し込まなければ幸いです。

私の挨拶はこのくらいにしたいと思います。今日はお集りのみなさんと会津美里町そして会津の未来語りをしていきたいと思います。どうぞみなさんよろしく願いいたします。

それでは続きまして、会津美里町杉山町長からご挨拶賜りたいと思います。

◆ 会津美里町 町長挨拶

会津美里町長 杉山純一 氏



みなさんこんにちは。会津美里町長の杉山純一でございます。

会津地域文化芸術フォーラム、私も会員の一人ですが、今日は会津美里町開催ということで来賓としてお招きをいただき、誠にありがとうございます。

高野さんは皆さんご存知のように、元県職員で会津地方振興局に勤めておられましたから、その時から大変お世話になり、その当時はTシャツなども作りました。書道家でもある高野さんが書いて作った「会津はひとつ」というTシャツ、我々も今も持っているところです。

「会津塾2025in会津美里」の開催を心よりお祝いを申し上げます。日頃より町の文化芸術及び教育に対しまして、深いご理解とご協力を賜っておりますことに重ねて感謝申し上げます。会津塾は会津地域文化芸術フォーラムのメイン事業でありまして、「会津はひとつ」という考えのもと、文化芸術を基本に据えた創造的な会津の地域づくりを会津に住む住民の皆さん、事業者の皆さん、会津に思いを寄せる皆さんと「共に考え、共に汗をかき、共につくる」を理念として展開されている事業と聞いております。

今年度から会津17市町村を巡回しての開催となり、合併20周年を迎えた本町で開催されることに対し、深く感謝を申し上げます。

なお、本日の基調講演には本町地域おこし協力隊4名が、分科会には本町職員2名が講師やパネラーとして参加いたしますので、参加者の皆さんとそれぞれのテーマについて、会津塾の理念でもある「共に考え、共に汗をかき、共につくる」を実践する良い機会としていただければ幸いです。

結びになりますが、本日ご参集の皆さんのご健勝、ご活躍、そして会津塾のますますのご発展を心よりご祈念申し上げ、私からのご挨拶とさせていただきます。

本日はよろしく願いいたします。

◆◆◆ 基調講演 ◆◆◆

地域おこし協力隊がみる 会津美里と会津の魅力と未来



<パネリスト>

ボランティア班 (高田)	齋藤道子さん
会津本郷焼班 (本郷)	大友悟さん
農業担い手班 (本郷)	須藤真弥さん
新鶴振興班 (新鶴)	菅原羽津紀さん

<コーディネーター>

高野武彦 (福島大学行政政策学類客員教授)

<高野客員教授>

それでは、これから基調講演「地域おこし協力隊が見る会津美里と会津の魅力と未来」こちらの方に入っていきたいと思えます。それでは登壇者のみなさん、お席のほうに進んでください。よろしくお願いいたします。

それでは登壇者の皆さんを紹介いたします。まず一番奥からボランティア班、高田地区を代表していただき齋藤道子さんです。続いて会津本郷焼班の大友悟さん、続きまして農業担い手班の須藤真弥さん、最後に新鶴振興班の菅原羽津紀さんです。

ただいま4名の方に登壇いただいたところでございますけれども、まず最初に基調講演を始めるにあたりまして、まず私の方から今回の会津塾全体の趣旨について、改めてお話ししたいと思います。

今、急激に進む人口減少というのは全国共通の問題です。特に会津地域は昨年17市町村のうち13市町村が消滅可能自治体と言われてしまいました。ここ会津美里町もその中の一つです。さらに高齢化も輪をかけています。会津地域は福島県内の高齢化率ワースト10に8町村が入ります。

会津の17市町村のうち14町村が高齢化率40%を超えています。30%台は喜多方市、湯川村、会津若松市ですけれども、喜多方市は39.4%で間もなく40%になると言われております。多くの方はこの高い高齢化率を非常に悲劇的に言います。しかし私は見方を変えることが大事だと思っております。

会津美里町の高齢化率は44.3%です。見方を変えれば「会津美里町に住み続けたい」と思っている方が44.3%もいるということです。会津美里に「骨を埋める覚悟」で住んでいらっしゃる方々です。これらの方々をまずは大事にする、そうした地域づくりをしていかなければならないと思います。そして残りの55.7%の住民、これらの方の中で50代はなんとなく、住み続けていこうと思いつつ、子供がどこに住むのかな、自分の仕事がどうなっていくのかなと不安を持っています。なぜ住み続けたいと強く思えないのか、その理由は住み続けていく自分の未来予想図が描けないからだと思えます。

特に高校生です。就職しようとした時に会津美里で一生暮らしていく自分が描けない。だから首都圏、仙台等に出て行ってしまおう。大学生、卒業して会津に戻って生きていく自分の未来予想図が描けない。だから帰ってこない。女性の皆さん、会津で自分のやりたいことをしながら、幸せな家庭を築いていく、そういう幸せな未来予想図がなかなか描けない。こうしたことが人口減少問題の核心ではないかと思えます。これを「誇りの空洞化」と学術的には言われております。地域への誇りがこれを食い止める鍵であります。人間、誇りを持つとその誇りを守ろうとします。そしてさらに磨こうとします。その磨こうとするのが「挑戦」になります。この挑戦は未来への挑戦であり、地域活性化につながるものです。人口減少対策には、これまでの少子高齢化対策とか、雇用対策、移住対策と合わせて、この「誇りの空洞化」対策を「車の両輪」としてやっていかなければならないのではないかという風に考えているところです。

今日はそうしたことを皆さんと一緒に考えていきたいと思ひ、まずは4名の地域おこし協力隊の皆さんに目を向けて議論していきたいと思ひます。

会津美里町は冒頭の挨拶で申し上げましたけれども、10年前から地域おこし協力隊を活用した地域の課題解決と移住定住政策に積極的に取り組んでいる福島県内でも先進地域であります。これまでも多くの地域おこし協力隊が活躍されて、住民の皆さんにも親しまれてきたと思ひます。



こうした中、地域おこし協力隊の皆さんが、どこでどのような活動をしているのかは、活動報告やホームページ、SNSで知っていらっしゃる方は多いと思います。しかし、会津地域の外から来た地域おこし協力隊の皆さんが、会津美里町や会津地域、今自分が取り組んでいる農業や商業などの地域に対してどう思っているのか、そういったことを発信する機会は少なかったと思います。

本日、これから始める基調講演「地域おこし協力隊が見る 会津美里と会津の魅力と未来」は、私たちが改めて「会津美里町の誇り」、「会津の誇り」を認識するために、地域おこし協力隊の皆さんの目線で見るとどう見えてくるのか、そういった見え方をこれからの地域に作りに参考にしたいと思い、この企画をしているところです。

早速始めていきたいと思います。まずは自己紹介を兼ねて、どんな活動をしているのかということにつきまして、地域おこし協力隊の4名の方々から聞いていきたいと思います。先ほども簡単に言いましたけれども、齋藤さんは旧会津高田町、須藤さんと大友さんは旧本郷町、菅原さんは旧新鶴村という風に分けております。それぞれ旧会津高田町、旧本郷町、旧新鶴村についてのコメントも含めて自己紹介をお願いしたいと思います。

それでは齋藤さんよろしくお願ひいたします。

<齋藤道子さん>



みなさん、こんにちは。私は広島県の福山市というところで生まれまして、それから結婚を機に福島県に移り住み、福島市の方で3人の子育てをしながら26年間福島市に住んでおりました。

実は夫が会津美里町高田の出身で、高田の中でも尾岐地区という山の方なんですけれど、そちらの出身ということもあり、地域おこし協力隊として今回ボランティアの活性化というミッションに応募しまして、この4月に着任いたしました。

私にとって、会津美里町は「いつかは住む町」でした。お墓もあるので、骨を埋める町という意識はずっとあったんですけど、それでもやはりずっと26年間住んでいた福島市から離れるにあたっては、そこまでやってきた仕事とか、NPOでスポーツボランティアの事務局をずっと20年やっけていまして、その他に高校で社会科を講師として17年間教えていましたので、そういう仕事を切ること、それからお友達、ママ友をはじめとしてたくさんのお友達ができていましたので、そこから離れることっていうのには、やはりちょっと決心が必要だったんです。けれども、ボランティアの活性化っていうのにも魅力を

感じて、これは私に課せられたミッションとしては面白そうだと思ってこちらに参りました。

朝通勤していると、本当に会津美里町に来てよかったなと一番思うんですね。尾岐地区から役場まで来るにあたって美しい扇状地の山と盆地の間に広がる緩やかな傾斜があって、そこに田んぼ、稲、そして果樹。まだ半年しか過ごしてないんですけど、日々変わっていくその自然の美しさっていうのに、本当にここに来てよかったなと毎朝感じているところです。

そして、ボランティアの活性化ということで、まだ何をしたいか良くわからない状況なんですけれど、たくさんの地域活動、地域の中でどうやって支え合いというのが行われているのか、日々考えています。

この町っていうのは本当に考えようによっては、江戸時代から、もっと昔の日本の集落文化、里山文化をそのまま残しているすごい稀有な貴重な地域なんじゃないかなと思ってます。それにはおそらく住民の中で「支え合い活動」がしっかりと行われているからこそ守られているとも感じて、それを探ること、見つけること、それがまずはボランティアの活性化の第一歩になるんじゃないかと思っています。

3年かかって何ができるかわからないんですけど、まずはそこを知りたいと思い、地域の集まりに出かけて行ったり、素敵な人を見つけてNoteに書いたり、そんな活動を今しているところです。活動をしていると「あら、あんたあのきみこさん家の嫁がよ？」なんて、お声をかけていただくこともたくさんあって、本当に皆さんすごくあたたかくて優しく、すごくありがたいなと、ここに来てよかったなと思っている日々です。

<高野客員教授>

齋藤さん、ありがとうございます。今、里山文化がそのまま残っているところという発言があったのですが、感じている里山文化、こんなところに魅力を感じているんだっていうのがあったら教えていただけますか？

<齋藤道子さん>

集落内で結構全て完結するだけの力を持っているなと思っていて、多分、自分の家の中でも完結しているとは思いますが、集落と集落の距離が結構ありますよね。そうした距離がある中で、皆さんがちゃんと生活を営んでいて、特に集落地域であればあるほど、三世同居ですとか、そういうような形式も残っていて、これはなんかすごいなと一番感じています。集落があってその外側に田んぼがあって、そして果樹があってという、生活する部分がまた周りにある景色というのが、まさに日本の里山文化の典型的な風景だなと思っています。

<高野客員教授>

ありがとうございます。まさに今仰っている通り、会津美里町って、集落を基本にして田んぼがあつたり畑があつたりというところが、とても魅力的な町だなんて思いますよね。そしてそこが先ほどお話にもあつた扇状地っていうところも関係してくるのかなと思うんですけども、社会の先生だったということで、その扇状地に関して、何かお話ありますか。

<齋藤道子さん>

扇状地っていうのは山から平地に出る間に、コロコロした石が中心になって水が運んできたものがたまる斜めの扇形の土地のことを扇状地っていうんですけど、真ん中では水が得られないんですね。なので扇状地の山の一番近いところと、降りるところに集落はできて、間は水が少ない方がよく育つ果樹が美味しいものができる、という風に生徒に教えるんですけど、本当にここにはそのままの風景があるなという風に思っています。

<高野客員教授>

ありがとうございます。ちょっと無茶振りだったかもしれませんが、どうもありがとうございました。それでは続きまして、大友さんお願いします。

<大友 悟さん>



はい、よろしく申し上げます。大友悟と申します。出身は、千葉県の八街市という落花生が有名な町になります。そこで学生まで過ごしまして、大学の進学を機に関西の方へ移住しました。そこで大学と大学院で学び、そのまま就職して11年ほど奈良と大阪で住んでおりました。

学生時代の頃はずっと化学をやっておりました。そこから化学の研究職として大阪で勤めておりました。なんでその化学やっていたやつが急に焼き物をやりたいと思い始めたかって言う

と、化学でやっていた分野が塗料という分野で、その塗料という分野と焼き物が非常に似通

った分野で、塗料の研究から焼き物に行ったら面白いんじゃないかっていうところで、陶芸家として志すようになりました。その中でどうやって陶芸家になったらいいんだろうみたいなところを必死に探していたところ、今回会津美里町で本郷焼の技術継承というミッションで募集があつたので、去年の4月に応募させていただいて、こちらに移住してきました。

会津美里町で一番最初に思ったことは、雲がすごく近いなと思っていて、やっぱり大阪とかそういうところにいると、ビルがあって雲とか全然見なかったのですが、会津盆地から見た雲が、雲の影とかも見えたりとか、あと雨柱とかが見えたりして、そこがすごく印象的でした。

今住んでいる本郷地域は、町歩き、歩くのがすごく楽しい町だなんていう風に見えています。会津本郷焼はもちろんですが、向羽黒山であったりとか、正直全然ここに来るまでは分からなかった事っていうのが多くて、山城ってこういう風になってんだとか、これは簡単に攻められないよな、みたいなことを想像しながら歩いていると非常に面白いんです。山から降りて本郷の町並みを見ると水路があったりとか、ちょっと路地に入ると窯元があってっていうところがいいですね。ここに来る前に結構色々な陶芸の産地を旅行して遊びに行くことが趣味だったので、いろんな産地を見ていたんですけど、なかなか移動が大変で車で移動しなきゃいけなかったりとか、場合によってはタクシー捕まえるとかそういうところが多かったんですけど、本郷の町っていうのは、歩いていろいろなものが見られるっていうのが一番の魅力かなと思っています。

現在の活動としては、会津本郷焼の陶芸の技術継承ということで流紋焼という窯元でお世話になっています。そこでは土を作るところから作品を作って焼き上げるというところまで一貫して学ばせていただいております。色々物を作りながら、もちろん厳しい指導だったり優しく教えていただいたりしながら、日々すごく楽しく過ごさせていただいております。自己紹介としては以上です。

<高野客員教授>

大友さん、ありがとうございます。関西からこちらにいらっしゃったということですが、塗料から焼き物のところに行って、全国の中でもいろんな焼き物がある中で、なぜ会津本郷焼を選ばれていらっしゃったのか教えていただけますか。

<大友 悟さん>

正直な話、募集があったから初めて知ったっていうのは本当に正直な話です。ここに来るまで会津本郷焼という焼き物を、お恥ずかしながら知らなかったのですが、そこで募集を見て知っていく中で、例えば 陶器と磁器という2つの原料が取れるという、なかなか珍しい産地であるところであったりとか、12の窯元さんが本当にこう別々の作風が異なるというところに魅力を感じました。例えば備前焼とかだったら、こういうものみたいな感じのものが決まってるんですけど、ここの本郷焼だと本当に作家さんの個性がそのまま出てるっていうので、非常に魅力を感じています。あとは、こちらに一度訪れた際に、役場の方とその時に紹介してくださった町の方々がとても優しくて、是非ここで陶芸を学びながら過ごしたいなと思って移住してきました。

<高野客員教授>

作家の個性を出しやすいとか出せるということは、かなり自由度があるということだと思います。皆さんの活動を自由にやっていけるよう、支える仕組みや風土があるところもなのかなと思ったところです。自己紹介の中で町歩きが好きだっておっしゃっていましたが、会津美里町に来てほしい1年半になるころでしょうか、こちらに来て、大友さんの一番推し、おすすめはどこでしょうか。

<大友 悟さん>

やっぱり山城を歩くのが一番いいですね。まだそんないっぱい歩いているわけではないんですけど、町の詳しい方に教えてもらいながら歩いたりとかして、ここはこういうものがあったんだよ、とか、ここ実は戦争の時攻めてくる道で、ちゃんとここでブロックしてるんだよ、みたいなのがちゃんと今も地形として残っているっていうのが非常に面白くて、そこが私のおすすめというか推しの場所になります。

<高野客員教授>

大友さんのような若い方にそういう風に感じていただけること、本当に嬉しいなと思って聞いておりました。ありがとうございます。それでは須藤さんお願いします。

<須藤真弥さん>



こんにちは。千葉県流山市から来ました須藤真弥と申します。今年4月から着任しました。

大学は農学部で学んでおりました、卒業後1年目は東京の方で就職しました。自分は2020年卒でコロナの時期だったこともあり、東京の会社に就職したのですが、仕事がないってことで福岡の方に転勤になりました。その後転職しまして、長野の方で3年間GISのシステム開発の仕事に携わっておりました。

一応大学が農学部なので、農業に行きたいという志はあったのですが、お金がないということで、卒業後に農業に行くのをやめました。ただ長野で3年間過ごすうちに、やっぱり農業行きたいということで、1回実家の流山に帰ってどうやって農業を始めるか考えていた時に、会津美里町の募集を見まして、これだったら行けるなと思って会津美里町の農業の担い手として応募しまして、今年4月から着任して活動しています。

今の活動は、本郷の「米夢の郷」さんの方で水稻栽培を学ばせていただきつつ、個人農家さんの方で桃の栽培のお手伝いもさせていただきました。卒隊後、独立就農できるように就農準備も進めています。今年から三反の畑を借りることになりまして、来年の春から桃の苗木を植える予定になっています。

今、本郷に住んでいるのですが、自分的に驚いたことが「秋季祭礼」、お祭りですね。秋にあるお祭りで、本番前に2～3週間かけて山車を作ったり、太鼓の演奏準備をしたりしています。自分も最初の1週間だけ準備を手伝わせていただきましたが、米の収穫が始まったこともあり、その後行かなくて、本番も出てないっていう、ちょっとここで喋るには申し訳ないのですが…。ですが、流山では、こういったお祭りというのが基本なかったですね。だから何週間もかけて準備して、町の区画を仕切って地区でやるっていうお祭りがなかったので、すごく新鮮でした。子供たちも夜7時半から太鼓の演奏を楽しくやっていたりとか、大人の人も山車作りをみんなで協力してやっているのとかを見ていて、本当に皆さん楽しそうにやっていたので、2週間3週間も準備して大変なことだと思いますが、お祭りが残っていけばいいなと感じております。

<高野客員教授>

須藤さん、ありがとうございます。福島県では、新規就農者がどんどん右肩上がりが増えてきているところなんですけども、若い方じゃなく、定年でリタイアしてから入る方々も結構います。しかし、須藤さんのように若くて就農したいという、一度、会社勤めをやっているながらもやりたいなと思ったっていうところが非常に嬉しいんですが、農業の魅力って今どんな風を感じているんですか。

<須藤真弥さん>

自分は4年間会社勤めしていて、パソコンの画面に向かって仕事をするのがそんなに好きじゃないっていうことがわかって、それで、やっぱり農業したい、外仕事やっている方が楽しいということで自分はここに来ました。魅力って言うと…、まあ正直大変ですから（笑）。個人農家さんになる方のほうが多いと思うので、やっぱり自分でやりたいことができる、自分で考えたことが実行できるっていうのが農業の魅力だと思っております。

<高野客員教授>

自分でやりたいことが実行できるということ、いいですね。実際、米をメインにしてやりたいんですか、それとも会津美里にいと果樹とかもあるんですが、これからはどんなところを主としてやっていきたいと思っらっしゃるんですか。

<須藤真弥さん>

自分は果樹で、桃のほうをメインで独立就農していこうと考えていまして、お米のほうは、現段階ではお手伝いという形でやっっていこうと考えております。

<高野客員教授>

会津美里町、先ほどの大友さんも、かなり自由度が高いという話でした。須藤さんも、農業に自由に取り組むことができるというところで、この「自由度が高い」ということがキーワードだったかなと思います。本当にありがとうございます。それでは菅原さんお願いいたします。

<菅原羽津紀さん>



こんにちは。私は新鶴地域の振興活性化というミッションで協力隊として活動を始めて2年目になりました。宮城県の栗原市出身で、栗原市ってというのはもう宮城の一番岩手寄りの内陸のところなんですけど、そこから大学進学を機に埼玉に移り住みまして、4年間埼玉に住んでいました。

大学では雑誌、出版編集とかデザイン系を学んでおりまして、地域おこし協力隊を志したきっかけとしては、自分の地元の地域の魅力を発掘するウェブサイトというのを卒業制作で作りました。その卒業制作を作成する期間、東京と

宮城を行き来して取材している中で、地域の魅力ってもっと伝えられるという地域の可能性に気づきました。そして、自分の大学で学んだデザインとかそういうのも使いながら地域と関わっていききたいなと思っていたところに、教授から地域おこし協力隊っていう職業があるということを教えていただいて、そこで会津美里町の地域おこし協力隊の募集と出会って今に至ります。

新鶴地域の好きなところというか、好きなスポットがあるんですけど、新鶴温泉を登っていくところの坂の前の米沢という地域のところに、開けた場所があって、田んぼと会津地域と磐梯山と望める場所があるんですが、そこから見る景色がとても好きで、四季折々の表情が見られて、車で新鶴地域、そこを走るたびに、なんか素敵だなと思っています。ぶどうの栽培が盛んなんですが、私はこちらに来るまでぶどうといえば巨峰かシャインマスカットしか知らなかったんですけど、ぶどうは何十種類も種類があるということを知っ

て、ぶどうの美味しさに気づいて好きな果物は何かと聞かれたら、ぶどうが上位にランクインするようになりました。

私の活動についてなんですけど、今年度の活動としては「にいつるこねくと」というフリーペーパーを発行しております、地域で頑張っている方々や新鶴地域のイベント情報などを取り上げているフリーペーパーになっております、今のところ4冊発行しております。地域の特産品と称してイベントで地域の直売所やワイナリーさんとか下駄屋さんとかに協力してもらって、出店したりだとか、あとは自分でイベントも今年は開催しております、「ワインぶどう畑で写生会」というワインぶどう畑の中で水彩画を描いて、その後新鶴温泉さんの方で「新鶴アートフェス」と称して、水彩画を含めた計30点以上の作品を飾らせてもらって、水彩画の表彰式を行ったり、物販、ワークショップなども開催しました。あとはSNSでの発信なども行っております、地域のイベント情報や、会津美里町の暮らしなどを発信しています。

私は平日動いていることが多いので、おじいちゃんおばあちゃんたちと関わる事が非常に多いんですけど、基本的に70代以上の方たちは本当に元気で、自分の取り組んでいることに生きがいを感じて、たとえば農業とか自分の生業とかを生涯現役というか、そんな方が多いような気がしております。

一方で、後継者不足っていう声もとてもたくさん聞いていて、先ほどお話もあったように若者が外に出て行ってしまったりとかそういう課題があるのも現状だなと、とても感じています。私が協力隊を通して町の魅力を微力ながら発信して町のファンを増やしていきたいというのが活動の目標です。

<高野客員教授>

菅原さん、ありがとうございます。私も本当に新鶴から見る磐梯山ってとってもいいなと思っています。実は今日のパンフレットと言いますか、チラシの写真ですね。これも会津美里町、旧新鶴村から見た磐梯山です。私も本当にこの場所が好きで、毎年写真をこのアングルで撮ったりしているんですけど、本当にいい景色ですよ。この磐梯山があって、稲穂があってというのが、ここが本当に会津美里の魅力だなんて感じるどころです。

あと、皆さんももしかすると、最近民友新聞で菅原さんのことは見たかなと思うんですけども、新聞の方でも紹介されていたところですが、「にいつるこねくと」とてもいいですよ。私も菅原さんと知る前に、あるお店で「これいいんだよ」って紹介されたのが「にいつるこねくと」でした。町の方々に相当愛されているんだなっていうので、作者に会ってみたいなと思っていて会えて本当に嬉しいなと思っているところです。そして多分一番今若いのかなと思うんですけども、お話を聞いていて、逆に高齢者の方から元気をいただいているような感じに受け止めたんですね。実際高齢者の皆さんから、どんな元気をいただいていますか。

<菅原羽津紀さん>

今日も実はここに来る前に、新鶴文化祭っていうのをやっていたんですけど、そこに行ってきた、いつもお世話になっている下駄屋さんが出店していたりだとか、直売所の皆さんも作品出されていたりしていたので、挨拶がてらちょっと行こうと思って、あと無料のカレーも目的に行ってきた。そしたら私を見つけて「羽津紀ちゃん！」って声をかけてくれて、私のことを覚えて声かけて優しくしてくれるのがとても嬉しいです。あと「お茶のみに来てね」とか誘ってくださったりとか、そういうのもうれしいです。

<高野客員教授>

高齢者の方々から元気をいただくということは、やはり若い皆さんも、ここに暮らし続けていきたいなって思えるところになるのかな、と思いますよね。ですから、高齢の方々も若い人たちにどんどん元気を与えていくっていうのも大事なのかなと、今感じたところでもありました。ぶどうが好きだということなんですけど、桃はどうですか。

<菅原羽津紀さん>

実は桃も大好きで、ただ新鶴で桃をやっているところが少ないので、今話さなかったんですけど（笑）

<高野客員教授>

じゃあ、今度は須藤さんがおいしい桃を作ってくれると思いますので（笑）

自己紹介を兼ねて一巡したところですが、今度は質問を変えてみたいと思います。皆さんが地域おこし協力隊として活動している中で、こんなことをできればやってみたい、私はここにこだわりを持ってこういったことをやっていきたいとか、また活動を通じて、こうした発見がありました、その発見を活かしてこんなことしたいなということがありましたらお話いただきたいと思います。

今度は、大友さん、須藤さん、菅原さん、斎藤さんの順番で聞いていきたいと思います。大友さん、よろしくお願いします。

<大友 悟さん>

はい、よろしく申し上げます。私が活動を1年半やってきてまず驚いたっていうか、まだまだ全然学びの途中なんですけど、本当に会津本郷焼の歴史が深いっていうところに毎回毎回驚かされています。

会津本郷焼は、400年以上続いているというので、本当に歴史があるのは当たり前なんですけど、元々の始まりが、鶴ヶ城の屋根瓦を作るためにできたっていうところで、やっぱり焼き物っていうのは自然発生的に生まれるっていうよりは、何か必要なものがあって、

それに準じて生まれるんだなっていうのが、すごく学びになりました。

そこから一時期は100以上の窯元があったところが、大きな火事にあってしまって、今は12しかないっていうところで、そこがすごく寂しくもあるんですけど、その400年続く屋根瓦から続いている焼き物が今も続いているというところを、私もその後を継ぎながらいろいろ続けていきたいなと思っています。

個人的に今後やりたいこととしては、窯元として独立して陶芸作家として活動していきたいと思っています。そのための準備を今、窯元の弓田さんはじめ、いろんな方といろいろお話しさせていただきながら進めさせていただいています。

大きなことでやりたいなと思っているのは、今、会津本郷焼の協力隊が5人いるんですが、協力隊で工房を作りたいと思っています。やっぱり陶芸家としてやるってなった時に、すごく資金がかかってしまうところがあります。例えば土地はどうするのかとか、じゃあ窯はどうすればいいとか、普段お店を開くのだったら、お店をしながら陶芸できるのかとか、そういった色々な問題があります。実際一人でやっていくとなると、かなり厳しいところがあります。その中で協力隊の工房として、現役の協力隊の方たちがそこで学びつつ協力隊卒業後も、そこで陶芸をしながら、自分が本当に独立できるなってところまでいられるみたいなのを作りたいと思っています。

そうすることで、せっかくこの町で陶芸を学んだんですが、どっかに行ってしまうっていうところが、そこは個人の意思っていうところも大きく反映してくるんですが、そういうところがないように、なるべくこの町に残ってもらえる条件みたいなのを作りながらできればいいかなという思いで、今協力隊の工房を作っています。

場所は、cobacoという瀬戸町通りのところの向かいの、元豆腐屋さんのところを考えています。すでに今、雨漏りとかしていて、その雨漏りの工事とかをしているんですが、来年ぐらいから徐々に使いつつ、街の皆さんにも手軽に土を触っていただけるような場所にしたいなと思っています。こちらに来て思ったのが、本郷焼を知ってるけど最近はあるまいよとか、買わないよねって言っている方が非常に多くて、私個人的にすごくそれが寂しいなと思っています。私としては、どうしても陶芸家になりたくてきたっていう意味で、窯元の産地が地元にあるって言うところは本当に全国的に少なく、稀有な本郷焼っていうところがある町の地元の方に、やっぱりもっと本郷焼っていうものを自信を持って、気軽に触って体験してみたいなところができたらなっていうふうに思っています。

SNS等を含めて徐々に発信して行って、本当に来年ぐらいから皆さんも気軽に来られるような協力隊の工房みたいなのを作っていただけたらいいかなと思っているので、ぜひ協力の方よろしく願いいたします。

<高野客員教授>

大友さん、ありがとうございます。協力隊で工房を作る、素晴らしいですね。協力隊の皆さんは、今何人いらっしゃるんですか。

<大友 悟さん>

現役が5名です。

<高野客員教授>

OBの方も入るような形になるのでしょうか。

<大友 悟さん>

OBの方も自由に使えるスペースにはしたいなと思っていて、実際去年OBの方が1人独立して窯元としてやっています、そういった完全に自分のところでもてる方はいんですけど、なかなか家探しであったりとか、窯をもつっていうことができないので、そういうところを探しながらでも町に居ながら陶芸ができるようなスペースを作りたいなというふうには思っています。

<高野客員教授>

そうすると地域おこし協力隊3年というところもありますけど、3年後も会津美里で会津本郷焼を続けていける場を自分たちで作っていかうという取り組みなんですね。

<大友 悟さん>

そうですね。

<高野客員教授>

今いらっしゃる現役の皆さんは、だいたいそれをやっていかうかっていう動きなんでしょうか。

<大友 悟さん>

地元からUターンで来た方とか、Iターンで来た方とかいろいろいらっしゃるんで、全員が全員そこをずっと使うかっていうと、今迷ってる方も含めて決まってない方が多いんですけど、まあ何名かはここで、それがないとやっぱり本郷の町に残って陶芸はできないよね、みたいなどころがあるので、そこを作ることが本郷の町を盛り上げる、本郷焼を継承していくために必要なものなのかなっていうふうには思っています。

<高野客員教授>

素晴らしいと思います。会場の皆さんも、ぜひこういった活動を応援してあげていただければと思います。どうもありがとうございました。では須藤さん、お願いします。

<須藤真弥さん>

自分は農業班ですが、目標としては最終的に就農事例になればいいなどは考えていません。正直、会津美里町については協力隊の募集で知っただけで、それまで一切知らなかったんですよ。なぜ会津美里町の協力隊になったかと言うと、単純に待遇が良かったからっていうだけですね（笑）。だから、応募する前に会津美里町の募集説明会に行きまして、「桃やりたいです。独立してやりたいんですけど桃ってできるんですか？」って聞いたら、「桃やってる人いるから、できるんじゃない？」ぐらいの反応で…。本当にできるのか？と思って、いろいろとネットで就農事例とか調べたんですけど、就農事例は出てこない、経営指標とかなんかあるのかなと思ったら、何一つ出てこない…。

会津美里町に本当に行って大丈夫かなと思って、最終的には見て確認してくるかと思って、直接見に来たら、リンゴとか桃とかぶどうとかいろんな果物をやっている方がいらっしやっただけで、じゃあ多分頑張ればできるんだらうってことで、こっちにきました。

自分はお金がないので協力隊に来たんですけど、協力隊じゃない方法で就農するってなったら、どこかの農家さんの下に入って2年間研修して独立しますって方が多いと思います。その中で就農事例とか、経営指標がないと、そもそも就農場所としての候補というか選択肢にも入らなくなってしまうわけです。実際に会津美里町に来てみるといい土地がたくさんありますし、自分も米夢の郷さんの方から三反の畑を借りたんですけど、そこも日当たりや水の立地がいいですし、果樹を植えるのにいい場所でした。

自分は県外から来たので、なんとかして畑を借りなくちゃいけないってことで、その方の小さい畑の抜根作業もしていました。もう来年から塩をまいて草1本生えなくさせちゃうみたいな話だったので、だったら自分がやるかって作業してたら、隣の畑の方から「そんなところで作業しないでこっちの畑やってくれ」って話を受けたりとかもあったので、就農する場所としては本当にいい場所だなと自分は活動の中で感じました。本気で就農したい方にとって、少しでも会津美里町が選択肢に入るようにと思って、自分は就農事例になれるよう頑張っていきたいと思っています。

ただ自分は就農事例になりたいっていう話ですが、SNSとかで「会津美里町が就農するのに最適な場所です」って言って、農業にキラキラしたイメージを持った人を集めたいって言っているわけではないです。農業、本当にやっていて辛いので。適当な人に貸して1年で放棄されて草だらけで返されて、誰にも貸せないような状況になってしまう可能性があることも、この半年間やってきて分かりました。だからそういったキラキラしている人

ではなく、真剣に考えている人の選択肢に入れるように就農事例になりたいと思っております。

＜高野客員教授＞

須藤さん、ありがとうございます。力強い、若手就農事例になりたいというところで非常にありがたいです。本当に須藤さんは全然そういった知識も何もなくて、情報がない中でこちらに来て、今度は自らその就農事例になりたいという、素晴らしいです。今のお話で、農業は難しいんだよ、生易しいもんじゃないんだよ、キラキラ感じじゃないから、ちゃんと真面目に取り組む人間が来てほしいというところなんだと思うんですけど、農業はやはり真面目な人が向いてるのでしょうか。

＜須藤真弥さん＞

そうですね。いろいろな農家の方がいらっしゃいますが、繁忙期は朝から晩まで必ず仕事はやっています。今日はなんかやりたくないから行かなくていいかなみたいな、自分勝手な方には絶対できないようなものだと思っているので、真面目な方で、ちゃんと毎日畑見に行ったりとか、そういった細かいことができる方が農業に向いていると感じております。

＜高野客員教授＞

やはり成功事例を見せてあげることで、最初のハードルとしては低くなるのかなと思うんですけど、須藤さんは若い方なんですけど、地域おこし協力体で農業、就農目指してきてる方がかなりいると思うんですけど、他は若い方いらっしゃるんですか。

＜須藤真弥さん＞

自分のほかにもう1名50代の方がいるだけで、今農業班は二人だけになっています。

＜高野客員教授＞

そうですか。まだまだ若い人たちがこれから取り組むというところに、須藤さんが成功事例をしっかり見せて、新規就農者として背中を見せていきたいという強い意気込み、ありがとうございます。では、菅原さんお願いします。

＜菅原羽津紀さん＞

協力隊として活動する中での発見は、新鶴の方に限った話ではないんですけど、お話好きな方が多いなと感じておりまして、一度お話しすると立ち話で1時間とか普通にたってしまうこともしばしばあります。会津美里町の方は地域おこし協力隊にとっても寛容だなと

思っております、「地域おこし協力隊です」と言うと普通に受け入れてくださって、「どこから来たの？」だとか、あとは 町の広報に協力隊のページがあるんですけど、それを見て「広報に載ってた人ね」という感じで 地域おこし協力隊を知って興味を持って話しかけてくださる方が多いです。先輩たちが培ってくださった信頼のおかげだなと感じております。

活動している中でのこだわりとしては、協力隊としては当たり前のことかもしれないんですけど、地域の方とのつながりを大切にすることを心がけています。先ほどお話しした「にいつるこねくと」は、新鶴地域と誰かをつなぐというコンセプトで発行させていただいているんですけど、発行するにあたって私自身もより深く取材した方々につながっているという感覚があります。直近のエピソードだと、フリーペーパーの最新号は新鶴の根岸地区というところでワインぶどうを生産している組合さんを取り上げさせていただいております、その方達は新鶴シャルドネのワインぶどうを作っている方たちなんですけど、先週、新鶴庁舎の方でと会津美里ワインフェスという町の一大イベントが開催されたんですけど、その時に私プライベートで2日目の雨の日に行っていたんですけど、その時に私のことを見つけて組合の方が声をかけてくださって。その後に、周りにいた人に、自分たちが取り上げられてる「にいつるこねくとvol. 4」を持ってきて「これ、ぜひ読んでください」という感じで周りの人に配っていて、自分達の紹介に「にいつるこねくと」を使っただけで、とてもありがたいなと思いましたし、このように「にいつるこねくと」が新鶴の方と誰かをつなぐきっかけになっていればとても嬉しいなと思いました。

他にも、先ほどもちょっとお話出てきたんですけど、前回発行した「にいつるこねくと」は下駄屋さんでしたし、前々回発行した時の直売所さんは、イベントで地域おこし協力隊の新鶴ブースで、私と一緒に出店して下さったりと、とてもお世話になっているんですけど、先月開催した新鶴アートフェスでは、直売所のお母さん達が「菅原さんが頑張ってるって言うから応援しに来たよ」という風に言って足を運んでくださって、こういった地域の方達と繋がりが深まっていくのがとてもありがたいですし、フリーペーパーやイベントの出店などが地域の方のやる気や自信に繋がっていればとても嬉しいなと思います。

<高野客員教授>

菅原さん、ありがとうございました。今、お話し聞いていて、キーワードは「つながる」、「つなぐ」ということなんだなと思って感激していました。私もワインフェスとか何度か行ってます。今お話し聞いていて、若い方だとすぐにSNSと言うんですよね。インスタとか Facebookだとか。菅原さんからはその言葉が出なくて、「にいつるこねくと」という紙媒体でしょ。あと町の広報紙もこれも紙媒体ですよ。全部アナログの世界であるんですけど、菅原さんにとってやっぱりデジタルよりアナログの方なんじゃないかな。

<菅原羽津紀さん>

SNSでも発信しているんですけど、やっぱり関わる方っていうか、地域の方はSNSをやっていない方が多いので。新鶴も高齢化率ちょっと何%かわからないんですけど、会津美里町の中できっと一番高いと思いますので、そういった方々に、今はペーパーレスみたいなこともありますけど、やっぱり新鶴の中で情報を知ってもらうためには、紙媒体とか立ち話とかそういったアナログなことが必要なのかなと思っています。

<高野客員教授>

アナログの良さってのはあったかいですよ。柔らかいしあったかいし。いろんなデジタルで伝えきれない部分が伝えられるっていうところで。本当に若い方もアナログを大事にしてくださってやっていただいていること、ほんと嬉しいなと思いました。続けてください。どうぞよろしくをお願いします。それではお待たせしました、齋藤さんをお願いします。

<齋藤道子さん>

私がここで、こんなことできればいいなっていう風感じているのは、まずは「ボランティア」っていうワードの話なんですけれど、たぶん会津美里町の方に「ボランティア何かやっていますか」って言うと、「そんな、ボランティアなんかやってねえ」って皆さんだいたいおっしゃいます。ボランティアっていう言葉と、実際に会津美里町で行われている「支え合いの活動」っていうのは、なんか一緒のような違うような。そのもしかして違う部分かなと思うんですけど、集落とか昔の里山文化っていうのは、特に江戸時代から言えば、強固なヒエラルキー社会であるかなと思っています、まあ悪い言い方だと、身分っていう風に聞こえちゃうかもしれないんですけど、分をわきまえると、そういう分とかね、その分の部分かなと思うんです。

私は協力隊員としてだけではなくて、生活している中で、おばあちゃんとかと一緒に暮らしていると、やっぱりその集落を支えている中に、ちゃんと親方様とか言ったり、言葉遣いとかいろんな中で、ちゃんと階層的な形が残っていて、西洋で言うノブレス・オブリージュみたいな、やっぱり上的人是ちゃんと下の面倒をきちんと見るというような、外から見えにくい、でも確実なセーフティーネットっていうのがちゃんとあるんだなと思って。そこにボランティアという言葉が入り込む隙があまり感じられなくて。

じゃあ私は何をどうすればいいんだろうっていう風感じる中で、会津美里町の、問題かどうかかわからないんですけど、本郷、高田、新鶴という3つがっぺんに何かをやるって日が非常に少ない気がしています。今日も、私も新鶴の文化祭行って、本郷にも行って、そしてここに来たらこれをやっているっていう状態なんですけれど、御田植をやっている、永井野では集いの場をやっているみたいな。そういう所って、まあいいところでもあ

り、でも、もし私がボランティア活性化でやるのであれば、365日の中の1日だけ、みんなでボランティアをする日を作りたいという風に思っています。

じゃあ全員でボランティアすることってあるかな、17,000人の人が、っていう風を感じた時に思いついたのが、メドックマラソンっていう、かつてその話を聞いたことがあるマラソン大会なんです。これはフランスの片田舎、ボルドーっていうワインの産地ですね。すごいワインはレベルが高いんですけど、もう本当に畑しかない田舎で観光客なんか全然来ないところらしいんです。そこに40年前にマラソン大会を作った人が、シャトーを巡ってそのシャトーで少しワインを飲み飲み走るというワインマラソン大会を作ったら、そのマラソン大会がものすごく人気になって。特にコスプレをしながら走るっていうことで大変人気になって。それと同時にボルドーワイン、中でもメドックワインの価値がブランド効果がものすごく上がったっていう話を昔聞いたことがあって、ワクワクするなと思ったことを、この会津美里の風景、そしてワインがある、ぶどうがある、そしてさらに日本酒の酒蔵も3つあるっていうような、この町が持つ力っていうのがあって、私の中ではできるんじゃないって思って考えています。

もちろんそんな簡単にできる話ではないんですけど、どんなマラソンが人気が出るかっていうと、ずっと美しい風景を見続けられる、そしてただ見続けるじゃなくて、そこに応援がいる、そして運営がみんなニコニコしていて、ボランティアが元気で楽しんでいるマラソン大会は人気が出ます。日本で人気じゃなくて、最初から世界で人気が出る。世界の人が目指すマラソン大会を作れば、もしかしたら子供たちも、まさに高野さんがおっしゃっていたような「会津美里町の誇り」ですよ、ふるさとの「誇り」っていうのを感じられるような、365日の中の1日しか使いませんから。町民全員がボランティアをする日を作りたいなっていうのが夢です。

<高野客員教授>

齋藤さん、ありがとうございます。私も、これすごいマラソンだなと思うんですよね。この向かって右下のところワイン飲んでますけど、これ給水所ですよ。ワイン飲んで走っているんですよこの人たち。すごいなって思うんですけど、今本当にお話し聞いててハッとしたのは、ワインもあるし、そして日本酒もあるしね。実際このマラソンの中でボランティアっていうのは、スタッフもボランティアになるんですか。

<齋藤道子さん>

はい、もちろんスタッフもなんですけれど、コースを何日か前から草を刈るとか、お花を飾るとか、それから応援する「頑張れ」って応援するのも、ものすごく大きなボランティアです。

それにも出ていけない、たとえば寝たきりのおばあちゃまがもし関わりたいとしたら、私は寄付の100円でもいいと思うんですね。何らかの形でそれに自分が会津美里のマラソンに関わっているっていう形が作れたら、そんなマラソン大会、たぶん世界中にないので、町民全員ボランティアマラソンという素地があるかなと夢に思っています。

<高野客員教授>

素敵ですね。マラソンっていうと、俺走れないから、私走るの苦手だからって言うんじゃないくて、じゃあ給水場でこういったところを手伝いたいよとかっていうのもいいし、うちのお酒出そうよっていうところでもいい。またこういった方々を支えるスポーツボランティアという形での取り組みでもいいし。終わった後、町あげての打ち上げみたいなこととかもあるといいね。

<齋藤道子さん>

もちろんです。給水といいながら「給食」ですよ。地元のお母さんたちが作ったおいしいこづゆだとか、納豆汁だとか、そしてもちろんフルーツ。こんなおいしいフルーツが給水所に並んでいたら、もう大人気になると思います。最後の打ち上げは、新鶴のワイナリーのあたりでパッと。今工事をしていて、二年後くらいですかね、陸上競技場ができるということなので、そういうところでお祭り騒ぎ楽しそうだなと思います。

<高野客員教授>

ありがとうございます。走る人だけじゃなくて、支える人いろんな人が自分の関わるところで楽しんじゃえっていうところなんですね。ほんとありがとうございます。

<齋藤道子さん>

一番大事なことをいうのを忘れていたのですが、会津美里には「走る文化」があるんです。高田中は4年前ですか 全国2位になったっていうのもありましたし、会津美里町の私の知り合いの中でも非常に走る方たくさんいらっしゃって、駒沢大学の総監督大八木監督なんかも高田中の出身と聞きましたので、この「走る文化」を守るということも一番大きなことです。

<高野客員教授>

ありがとうございます。すごく夢のある話になったかなと思います。これは会津美里町だけじゃなくて他の町村でもできると思うし、会津全域でやるということも本当は「会津はひとつ」でやれる話かなあとって楽しんで聞いていました。本当ありがとうございます

ここまで、2回お話が回ったところで、今度は3つ目の話に行きたいと思うんですけども、皆さんが地域おこし協力隊として活動している中で感じる、会津や会津美里町の未来づくりについてお話をしていきたいと思います。

今日の本題の部分に入っていきたいと思います。自分の関係あるところでもいいですし、須藤さんですと農業、大友さんの焼き物という自分の専門のところでも一つの世界についてでも構いません。こんなことをやれる可能性があるんじゃないかとか、地域を未来につなげていくためにはこうした組織作りが必要なんじゃないかとか、こういうサポートが欲しい、していきたいとかっていうようなことをいろいろとお話ししていただきたいと思います。今の活動に絡めての話でもいいですし、それから離れてもいいです。



ただこういう質問ですと、ここが魅力的でここが素晴らしいという、良い話をしなければならぬというように思われがちなんですが、そういったことではなくて、ここが入りにくいのでこういう風にすべきじゃないかとか、ここに見れば良い活動なんだけど、その場で終わっているから残念だとかそういう辛辣なお話でも構いません。

そういう話を言うと、なかなか言いづらいところもあるので、私のほうから例えばということでお話しますと、今の会津、各地で何とかマルシェとか、なんとか市ってやっていますごく楽しいですね。素敵なお店もあってとっても良いと思います。ただ残念なのは、同じ日にいろんなところで同時多発的にマルシェをやったり、市をやったりというところで、人が分断されてしまっているところはとても残念ですね。いい取り組みなのにどうしても点になっている。そこを面としてつなげたら本当に会津は観光客も地域の人たちも、つながりを持って面として地域づくりができるんじゃないかなって、そんな風に思ったりします。こんなようなお話でも構いませんので、皆さんお願いしたいと思いません。

今度は須藤さんからよろしくをお願いします。

<須藤真弥さん>

就農のことになってしまうんですが、まだ農業を携わって半年間で、まだ農業について全然知らないの、わかってないなって感じになってしまうかもしれないんですけど。

自分的には農業に関しては、農協の存在が大きいなって自分は思っています。別に農協の回し者とかそういうわけではないんですけど、何でもかと言うと、規格にあったものを全量出荷できるからですね。



本郷焼に例えて申し訳ないですけど、本郷焼で言ったら、お皿を作ってちゃんと規格に合ったものを作れば、雑貨店が全部買い取ってくれますよ、ということをやっているんですね。収入を上げようってなった時に、その価格を上げなくても収穫量を上げれば自分の収入が増えるので、販路を開拓しなくていいってところがいいところだと思っています。やっぱり販路を拡大するってなると、自分で魅力を発信して何とかして価値をつけて、他の人とも関わっていかねばいけません。そもそも農業って収入を得る期間が1か月とか2か月とか、その短い期間

の中で年収300万だったら300万稼ぐために作物を育てなくちゃいけません。その期間が販路を開拓するために時間取られて、結局収穫物は適当になって売れるものが少なくなってしまうと目も当てられません。その分、農協だったら規格が揃ったものであれば全部買い取ってくれますから、栽培に力を入れて動くことができますし、空いた時間で自分の販路で売る選択肢を取ることができます。だから、農業にとって農協の存在は大きいと思っています。

それと合わせて、会津美里町だと本当に全体で平らな土地が多くて、色んな作物ができます。自分もそうですが、県外から一人で来て周りに協力してくれる方が少ない状況なので、一人で農業をやっていかなければいけないってなった時に、販路拡大はそもそもできない可能性があります。でも会津美里町は広い土地がありますし、農協で全量出荷ができるのであれば、収量を増やす方向にシフトする考え方できます。会津美里町は補助金とかも手厚かったりするので、何でこんなに就農者が少ないのかなと疑問に思ったりしたので、会津美里町のことを対外に発信できればいいのかなって考えております。

<高野客員教授>

須藤さん、ありがとうございます。今いろいろ農協については言われてるところもありますが、今ずっとお話し聞いてますと、収量を増やすことに力を注ぐというところは、若い新規就農者の場合やはりそこが一番大事で、収量を増やすことに力を注ぐ時間が欲しいというところでしょうか。

<須藤真弥さん>

時間も欲しいですし、技術とか知識とかは師匠の方から学んだりとか、その技法を盗んだりではできるんですけど、販路は盗めないですね。競合相手になりますし。その顧客ちゃんみたいなのにはできないということも含めて、収量を上げることが一番手っ取り早くお金を稼げることになると思っています。

<高野客員教授>

逆に言えば、販路拡大のために農協というものがあるんでしょっていうところがあって、新規就農者こそ販路拡大に時間も割けない、ノウハウもないというところだから、農協というのが拡大のためにしっかりと支援していただくとありがたいというところでしょうか。

<須藤真弥さん>

自分の考えとしては、個人売買もそれは所得上げるためにやった方がいいんですけど、まずは農協出荷で基盤を作って、そこから所得上げるためにいろんな方法を自分で模索するっていうのが一番堅い現実的なやり方なのかなって考えております。

<高野客員教授>

農協のみなさんって結構丁寧いろいろやってくださいますよね。

<須藤真弥さん>

そうですね。現場の方は、この雑草わからないんだけどとか、この時期何の作業したらいいのかとかも丁寧に教えてくれますし、電話をすると現場を見に来てくれたりもするので、こんなに手厚くしてもらえるんだなと正直驚きました。

<高野客員教授>

本当だよ。ここに農協関係の方がいたら嬉しいお話だなと思うんですけど、本当に新規就農者にとって農協っていうのは、大事な存在だと思いますし、そういった新規就農者の販路拡大というところをみんなでサポートしていく仕組みって大事かなと思います。

では、菅原さんお願いします。

<菅原羽津紀さん>

冒頭でも高野さんからお話があったとおり、若い世代がこの地域で働いている姿が見えない、地域に希望が持てないというお話は、地域を周って行ってもよく聞く話でして、単純にこの地域で働いてる姿が見えない、希望が持てないというのは、会社が、自分の働き

たい職業がこの町にないとかといったことなのかなと思うんですけど、そこで私が会社立てますとか、そんな大それたことはできないので、自分に何ができるかなっていう風に考えた時に、若い方達に限らず、この町の方にこの町の良さを知ってもらって「誇り」に思ってもらうためのお手伝いができたらと考えております。



ぶどうの直売所マップを作っている時に色々な直売所を周ってお話を聞いていた中で、20歳の子がアルバイトをしている直売所がありました、そこでお話を聞いた時に、そもそも私、この1年半、直売所マップ作る1年半で新鶴地域で話した人達は、ほぼほぼ70代とか以上の方たちでばかりだったので、20歳の子と話す、本当に地元の20歳の子と話すのが、その時、今年の夏初めて話して、その子たちのリアルな話をお聞きして、まずは「地域おこし協力隊なんです」という話をしたら「この町にそんな人達いるんだ」という反応で、地元のイベントにも

あんまり行かないし、町の広報も新聞もあんまり見ないしということで、若い方に全然情報が伝わってないということが分かりまして…。

私はそういった方々に向けて一応InstagramだとかそういったSNSでも発信しているんですけど、それでもなかなかアンテナを張っていただかないと見つけてもらえないという現状ということが分かりました。

あとはたとえば、「にいつるこねくと」はまずは新鶴の方に見ていただきたいので、新鶴地域に優先して地域の様々な施設に置かせていただいているんですけど、そのどこの施設にもあんまり行かないというお話を聞いて、このようなものを作っても情報を受け取ってもらえる仕組みとかがないと、届けたい層にも届かないということが分かりまして、もどかしい気持ちになりました。

若い方達に、どのようにこの町の良さをとか魅力を知ってもらうか、本当に課題だなと感じます。これは会津に限った話ではなくて自分にも当てはまっていた話ではあるんですけど、私も宮城県の栗原市の田舎の方で育って、住んでいる時は地元の魅力が全然わからなくて、早く東京に行きたいな一としか思ってなくて、それで関東に出て初めて東京と宮城を行き来する、その卒業制作の期間とか普通に帰省する期間とかで地元の魅力を知って行って。使っている言葉が実は方言だったりだとか、最初は方言やイントネーションを指摘されてちょっと恥ずかしかったりだとか、そういった気持ちも感じていたんですけど、でも地元と関東を行き来する生活を通して、これって地元にはしかない良いところじゃんっていう風に思えるようになりました。

私の地域おこし協力隊になった理由にもつながっているんですけど、若い方が外に出た後も、地域に戻って来てくれるのが一番ではあるんですけど、地元には何も無いっていうのではなくて、地元にはこんないいところがあって、こんな素敵な場所なんだという、別の場所に行っても地元を誇りを持ってもらうことが一番重要なんじゃないかなと思っています。

そのためには、今はもしかしたら地元の魅力に気付いていない若者が多いかもしれないんですけど、私が協力隊の活動中に感じた会津美里町の魅力を、若い方にも知ってもらえるような形で、その形がどのようになるかはちょっと来年の活動になるんですけど、イベントの仕組みづくりなのか、今年やったフリーペーパーなのか、まだ言えないですけど残して行きたいなと思っています。

<高野客員教授>

菅原さん、ありがとうございます。本当に菅原さんもまだまだ若いかなと思うんですが、その菅原さんをもって20歳のアルバイトの子との話が、すごく衝撃だったっていうところなんですけど、実際菅原さんとお話しして、その20歳のアルバイトの子はどんな反応だったんでしょうか。

<菅原羽津紀さん>

直売所とかに「にいつるこねくと」を置かせてもらって、それに目を通して、「今新鶴温泉ってこんな感じになってるんだ」とか「その前のホットピアの時代しか行ったことなかったな」とか「あの下駄屋さんまだやってるんだ」とか、そういった地域の人でも知り得なかった情報をまとめられたっていうところはすごく嬉しいというか、そういうのを知ってもらえてよかったなと思いました。

<高野客員教授>

そうすると20歳くらいの若い子っていうのは、小学生くらいまでの記憶から、中学、高校時代ってすっかり抜けてる感じっていうところでしょうかね。

<菅原羽津紀さん>

今の新鶴中の子供たちとかは、結構ぶどう畑に授業で行ったりする機会とかもあるという風には聞いたんですけど、高校も会津美里町は一校だけなので、西陵高校とかだと、町の探求の授業とかでその町の魅力とかを掘り起こしたりだとか、そういった授業が盛んにやっていると思うんですけど、やっぱり高校から町外に出られる方がきっと多いというところで、そこでもうすでに地元の魅力をちょっと忘れかけちゃったというか、なのかなと思います。

<高野客員教授>

高校生以上で20代くらいの若い皆さんに、どうやって情報を届けていくとかか関心を持ってもらうかというのは大事だになっていうところですね。何か方策、感じたもの、考えているものありますか。

<菅原羽津紀さん>

ぱっと思い浮かぶものは、情報、SNSを消さないで残しておくとか、今、パッと思いつくのはそれくらいなんですけど。「にいつるこねくと」を最後発行していつでも読めるように置いてもらうとか。今は「にいつるこねくと」も限られたお金の中で発行していて、いろんなところに配って、もう手元にほとんどないみたいところもあるので、またあの再度発行していつでも読める形にしたりだとか。あとは データも一応ネットにあげているんですけど、全国ニュースとかになったら、情報とか県外に行っても知ってもらえるのかなとも思いますね。

<高野客員教授>

ありがとうございます。最後の集大成、期待していますのでよろしくお願いします。頑張ってください。

では、齋藤さんお願いします。

<齋藤道子さん>



はい、先ほど申し上げたように、町とか集落の中には、そういう見えないヒエラルキーみたいなものがあると思っていて、悪いことだけではなくて本当にセーフティネットとして非常に高い効果を持っていると思うんですね。それこそが支え合いだと思うんですけど、若い人がその中で息苦しさを感じるっていうことは、私からしたらなんか健全な若者の健全な育ちなんじゃないかなという風に感じます。だから誇りを持って1回飛び立たせていいんじゃないかなって思っていて。高校で出る、大学で出るっていうような、就

職して出るっていうような若者をボンと出してやるっていう意気込みと、でもそこに、「ちゃんとした誇り」を持たせるっていう、いつか帰ってきたいと思った時にはおいで、

帰ってきていいよっていう温かさを持った町にするっていうようなことが大事かなと思っています。

その1つの方策として、私が考えているのは町役場の職員っていうか、地域おこし協力隊もなんやかんや年間300万とかっていうようなお金をいろんな形で頂戴しているわけですね。その300万円を例えば5人で使うとしたら、1人60万円、月5万円もらえるわけですよ。私もそういう働き方をしてきたんですけど、扶養家族に入りながら、でもちょっと小遣いの、お金だけの問題ではなくて、社会とつながる機会として、ちょっと働く。でもそこに朝何時から何時までちゃんといなきゃいけないとかではなくて、責任を持って仕事をする。オンラインもある今は。いろんな働き方でそういう働き方ができる。

特に女性ですね。地元で聞いているとお嫁さんが逃げちゃったとか、そんな話はいくらでも聞きます。当たり前かなと思っていて、やっぱりそういうフレキシブルな働き方あるいは社会とのつながり方、そういう風穴が開くような組織があるといいなという風に、それを作りたいなと思っています。

それはマラソンの実行委員会を例えば常設にする。常設にすると1年かけていろんなことを考えられるので、それをたとえば5人の女性が回していくとか。たとえばですよ。そういうような面白い組織があるとたとえば片手間にカフェをやりながら生活する女性がいったり、おばあちゃんの介護をしながらでも社会とつながれたり、面白い形の働き方ができる実行委員会があるといいなと思っていて。その時には、その組織、実行委員会だけは若い人と年寄りのこういうピラミッドが逆になるといいなと思っていて、上になるべく若い人が立って、それを私のような年寄りがしっかり支えていくような、そんな面白いたった1年に一度1日だけの大会に、そういう組織が支えていたら面白いなっていう、これも夢物語でございます。

<高野客員教授>

齋藤さん、ありがとうございます。本当に大事なことだと思いますよね。若い人が誇りを持って1回は飛び立てというところ。やっぱり「誇り」って大事だと思うんです。その帰ってくるには、その「誇り」があるとやはり帰ってくるというところがあるので、いかにその誇りというものを醸成するかというのが本当に大事なことだと思います。同感です。

また、社会とのつながりの機会が必要だと。役割ですよ。それぞれ社会の中で、地域の中でどういった役割があると参加できるのかということと、つながり続けることができるというところ。実はそういった話をこれから、私の方の第二分科会でやるころなので、基調講演みたいになったなと思うところです。ありがとうございました。

やはりこの「関係性」っていうところ大事なところだと思うんですけども、特に若い方々にとって、「地域との関係性」ってどんなところにポイントを持っていたらいいかというと思いますか、「関係性」を持ちたいと思う方からは、どんなふうにしたら良いかアド

バイスをいただけますか。若い方じゃなくても、どうやって「関係性」を持とうとすればいいのかっていうところでお願いします。

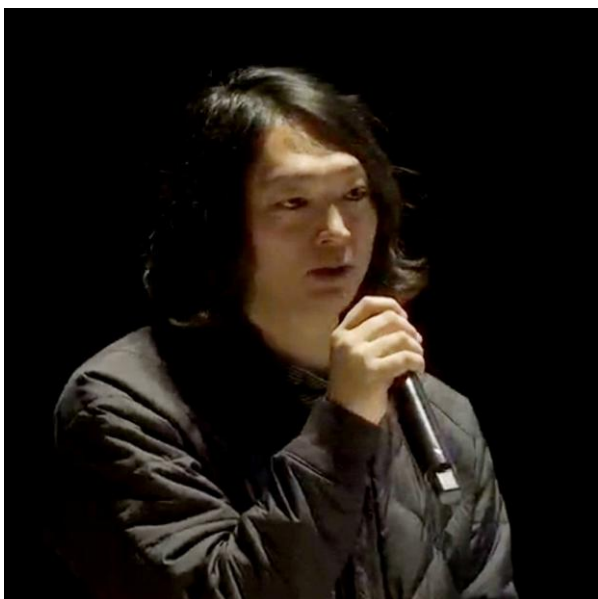
<菅原道子さん>

そうですね、ひとつはボランティアっていう手はあって。ボランティアというのは「自発性」、つまり自ら手をあげるということと、「無償性」はもちろん皆さん知ってらっしゃると思うんですけど、そして「社会性」です。つまり、自分の家族の面倒を見ることはボランティアとは言わない。それが地域あるいは町とか社会を支える、社会の役に立つことで初めてボランティアというということを考えると、自分だけじゃなくて、ちょっとでも誰かの役に立つ、家族じゃなくて地域の役に立つ、つまり本当に小さな地域貢献を全員が意識してやると、それは素晴らしいことだし、そこにちょっとお金が出るような、言ってみれば 5万円で働くのも有償ボランティアになるかもしれないんですけど、隙間的な今のシステムとはちょっと違って面白い働き方、関わり方、社会とのつながり方があるんじゃないかなと思っています。入口はボランティアでいいと思います。

<高野客員教授>

ありがとうございます。いろいろ考えるヒントになっていいお話でした。どうもありがとうございました。では大友さん、お待たせしました。大友さんからお話しいただきたいと思います。

<大友 悟さん>



はい、お願いします。さっき須藤君が農業は厳しいぞ、みたいなこと言ってたんですけど、もう焼き物も当然厳しいです。それはこう1年半いて、よりそう思いました。本当に今12ある窯元で焼き物だけで食べていってる窯元さん何人いるかって思うと本当に恐ろしくなるぐらい、焼き物で食べていくっていうのは相当厳しいです。でも、その中でやれることは必ずあると思っていて、逆にやらないと多分どんどん衰退してダメになってしまうところはずごく思っています。

そこで、今私と5人の協力隊の本郷焼のグループでやっている活動の一つをちょっと紹介したいと思います。今ふるさと納税のリブランディングみたいなことをしてまして、

こちらが2023年度の福島県のふるさと納税の表になります。会津坂下町だったら寄付額5.2億円あるよとか、郡山は2.1億円だねっていうところで、会津美里町は3,500万円になっています。そこの横の控除額ってところが1.3億円ってなってます、これは多分ふるさと納税で、もっといろんな町に還元したいみたいなことを思ってる方がいっぱいいらっしゃるということで、この数字になっているのかなと思っています。それはすごくいいことなんですけど、この寄付額のプラス面ですね、そこの3,500万のところをどうしても上げていきたい、上げていかないと焼き物の認知度向上であったり、町の税収とかも含めて変わっていかないと、こちらの取り組みをさせていただきました。

会津本郷焼の今までのふるさと納税は、ちょっと出せばいいんでしょ、みたいなところがあるような感じで取り組んでいまして、写真を撮ってあげるって言うので、たとえばこの5枚のカップとソーサーが、寄付額が4万円出ていました。実際、寄付額4万円でこちらを買うかって言うと私はちょっと正直買わないなっていうところが本当に正直なところなんです。多分それが実際の数字にもしっかり現れていて、年々寄付額っていうのは下がってました。

そこを何とかして会津本郷焼を知ってもらえるような形にしたいっていうところで、本当に写真とか画像編集とかやったことなかったんですけど、1からいろんな方に教えていただきながら、右側の写真のような形にしました。今焼き物でふるさと納税って言ったら、長崎県の波佐見焼っていうところがすごく有名でして、本当に寄付額、もう本当にとんでもない額を寄付してまして、そういったところを参考にどういった写真で、どういった見せ方だったら、どういった商品だったら寄付額を募れるのかみたいなのを5人で相談して、今やっています。

カップとソーサーとか以外にも、たとえば左上の酔月さんのどんぶり、すごく絵が素敵なんですけど、どんぶりを今使う家庭が、ふるさと納税でどれだけいるかっていうと、多分ほぼどんぶりを使う方はいないと思うんですよ。だから今の生活様式にあった商品を選ぶ必要っていうのも同時にありまして、そこも1個1個窯元さんに足を運んで、「こういう商品がいいと思うんですが」とか、「どういう商品をもっと知っていただきたいですか」みたいなことを窯元さんの方達とお話ししながら、右の写真のような商品と写真に変えていきました。

酔月さんだったら、どんぶりではなくてもうちょっと使いやすい左上のローストビーフ丼が載っている写真であったりとか、本当に現代に使いやすいような商品と写真を選んで今掲載しています。去年から始めたんですが、今年の9月末からふるさと納税が新しくスタートしています。

会津美里町では2018年からスタートしてまして、最初の年が24件、次が20件、21件でどんどん右肩下がりがあったんですが、今年リブランディングをした2025年のたった2か月で、今現状44件と今までの例年の2倍以上の数値になっています。ふるさと納税は皆さんやっている方もわかるかなと思うんですけど、年末年始に急いで駆け込みで結構される

方が多いので、多分年末12月とかに差し掛かったら、また一気に増えるのかなと思っています。まずは100件とか、それでもまだまだ私個人的には少ないなって思っているのもっと100件、200件、1,000件とか、そういう件数で行ければ、税収も含めてですね、会津本郷焼っていう認知度が上がるのかなと思っています。

なんでこういうことを今話したとかと言いますと、本当に大阪にいた時も人手が足りないとか、今も役場の方と話す、今役場の人手足りてないんだとか、本郷焼ももちろん人手足りてない、農業も人手足りてない。どこも人手足りてないっていうところがあって、そこは都会とか田舎とか関係なく、もうどこも人手は足りてないと思うんですよ。でもその中で何にフォーカスして何をしなきゃいけないかっていうところを本当に考えなきゃいけないんだらうなっていう風に、すごく偉そうですが思っています、やっぱり選択してこれをやるんだって言ってやると、素人の私でもやっぱり倍の数字には出せるっていう、何か成果は得られるっていうところで、ちょっと強い言葉になってしまうんですが、現状維持は私は衰退だなと思っています、やっぱり常にもっともっとやっていかないと、町も含めて会津本郷焼もどんどん下火になってしまうので、新しいこととか、今までと違うことをちょっとずつでもやっていきたいなと思いますし、少しでも応援していただけたらすごく嬉しいと思います。よろしくお願いします。

<高野客員教授>

大友さん、ありがとうございました。「現状維持は衰退」本当その通りで、最後にいい言葉をいただきました。本当にたった2か月で過去の件数の2倍になったっていう、このリブランディングというやつなんですけど、リブランディングって何っていう人もいるかと思うので、ちょっと解説します。リブランディングとは、いろんな今までの商品などを時代の変化とか顧客のニーズに合わせて、従来のイメージを再構築して新しい付加価値をつけるというようなことです。ところで、リブランディングの例としてあげたこの写真のほうは大友さん達が作ったんですか。

<大友 悟さん>

器は流紋焼さんの器なんですけど、写真の撮り方とか、あと画像編集して、言葉とかも変えてちょっと今の流行りに合うような形にしました。

<高野客員教授>

正直言うと私これ見ていたんですが、プロの方がやったと思っていたんですが、皆さんがやられたんですね。

<大友 悟さん>

めちゃくちゃ嬉しいです。ありがとうございます。

<高野客員教授>

会津美里町のふるさと納税は、モンベルのサイトでも紹介しています。私は、モンベルのサイトの方から会津本郷焼を見ていて、魅力的なのが出てきたなと思って感心していたところです。

会津地域はモンベルさんを使って会津美里町のほか、湯川村、磐梯町、柳津町、会津坂下町、金山町、西会津町、そして只見町はモンベルさんと連携した「ふるさと納税」をやっています。

この辺で閉じたいと思うんですけども、皆さんから共通していただいたことは、最後の大友さんの言葉にあったように、現状維持では衰退になる、すなわち挑戦が大事だということだと思います。

須藤さんのお話も、これからどう農業に挑戦していくかというお話でございましたし、菅原さんもこれから自分も見つめながら、人との交流を大切にしているいろんな形で挑戦していきたいというお話でございました。

齋藤さんのお話もやはり、今挑戦できる器というか、そういったものをしっかりと地域として作っていく、そういう仕組み作りも大事じゃないかということであったかと思えます。

4人の方から貴重なご意見をいただきました。これからの会津の地域づくりのために活かしていきたいと思えます。

最後に皆さんに感謝を込めて盛大な拍手をよろしく願いいたします。

どうもありがとうございました。

ここで基調講演を終了したいと思います。

会津美里町と会津の民俗芸能



<講師>

- 懸田弘訓 氏 特定非営利活動法人
民俗芸能を継承するふくしまの会 理事長
- 梶原圭介 氏 会津美里町郷土資料館 館長
- 大里正樹 氏 福島県立博物館 主任学芸員

<コーディネーター>

- 川 延 安 直 (元福島県立博物館 副館長,,
会津地域文化藝術フォーラムアドバイザー)

<川延コーディネーター>

今日は福島県下の民俗学といえば懸田先生ということで、ご体調があまりよろしくない中、遠方二本松からお越しいただきました。ありがとうございます。

あと、地元勢と言いますか、梶原さん。会津美里の伝統文化並びに文化財の第一線の研究者でいらっしゃいます。あと福島県立博物館から民俗学担当の大里学芸員にお越しいただいております。

今日は、まず冒頭を懸田先生が今まで調査研究なさってきた会津美里に関する伝統芸能のいくつか、まず映像資料をご覧ください、その後解説を



頂戴し、後半3名の方からクロストークという形でいろいろな会津美里の文化に触れていきたいと思っております。

よろしく願いいたします。

<懸田理事長>



しばらく時間を頂戴したいと存じます。

まず美里町ですけれど、なんでこんなに古いものが残っているんだと思ってただただ驚くばかりですね。しかし古ければいいってものではないんです。なぜ古いのが大切かと言いますと、その中に、いわゆる民俗芸能なら民俗芸能の原型といえましょうか、基本的なものが残っていることが多いんですね。それを知ることが、将来、継承発展させていくためにはどうしても必要なことなんです。よく歴史とは過去のことを学ぶことだと言われますけど、未来を見据えて、間違いなくそちらに進むことができるための糧

とするために歴史というのは学ぶんですね。今日は、会津にどんな素晴らしいものがあるのか、どこが大切なのかを、時間もないので急いでお話ししたいと思います。

(伊佐須美神社の巫女舞)

伊佐須美神社に巫女舞がございました。おそらく明治の初めに中断したんだろうと思うんですけどね。記録が多少残っているんです。この巫女舞を見ますと、まず右のほうの楽器。お囃子の楽器が書いてありますが、土拍子というのがありますね。これは大変珍しいんです、福島県でこれを使うということは。江戸時代には郡山なんかでも使っておりました。しかし、今使っているのは喜多方市の上三宮の太々神楽だけでございます。全部やめましたね。これ理由があるんですけどね。それから、楽器が、笛から小鼓、銅拍手、大鼓、大拍手、太鼓。非常に多いですね。巫女舞としては異例の多さでございます。

こういう素晴らしいものが伊佐須美神社に残っていたんですね。ではどういう巫女舞が古いのかというところ、ちょっと映像を見ていきましょう。これは新潟県の弥彦神社の巫女舞でございます。これは正式には撮影禁止なのですが、伊佐須美神社の宮司さんが特別な計らいで許しを頂いてくださって、それで撮影することができました。撮影禁止ですから多少暗くなっていますね。もう一人巫女さんがおいでになりました。舞う巫女の子供さんは右のほうにいますが、これからご覧いただきますけれども、どちら側に何回回ったか数えてみてください。巫女さんです。まだ若いですね 5~6歳ぐらいだと思います。

ここから始まります。前に進みまして、その後回り始まります。右に回りました。1回ですね、2回、3回。正面に戻りまして、逆に左の方から回りました。左に3回、右に3回ですね。この伊佐須美神社の記録を見ますと、カタツムリみたいにぐるぐる回っていますね。どこから始めるか、真ん中から始めます。左に1回回ったら右に1回。また左に1回、合計3回回っていますね。今のは同じ方向に3回、反対側に3回ですけども基本的に同じなんです。この方向を変える事を、芸能の言葉で回り返すと言います。回って回り返すことが巫女舞の特徴です。

(巫女舞の型)

今の巫女舞ご覧になって、芸能といえるほど複雑じゃないでしょ。手足を動かすわけじゃないし。ただぐるぐるっと3回回るだけですね。これが古い巫女舞の原型なんです。これが弥彦神社に残っているというのは珍しいことで驚きですね。巫女舞が始まったばかり生まれたばかりの頃の形ですね。その形が伊佐須美神社にあったんですよ。これは大変な事件ですね、まさに。おそらく幕末の戊辰戦争で途絶えちゃったんだと思います。

江戸時代にも途絶えているんです。それで浦上玉堂と次男の秋琴を、会津藩士が会津に呼びまして、復活したんですね。それも明治40年ぐらいで途絶えちゃったものですから、猪苗代の土津（はにつ）神社の同じ巫女舞を育てました。その楽人の方が記録を残したんです。それがその2枚目のプリントです。そこの左上の方、これが歌の楽譜です。折れ線グラフのようになっていますが、その線に沿って歌えばいいんですね。真ん中のやつは3回回るという、歩く順序を書いたものですね。これはだいぶ前になりますけど、今回のこの行事の立役者の一人であられる川延先生が、学芸員として博物館にお勤めになった時まとめた「浦上玉堂父子の芸術」という図録です。これ基本的な著書です。これを丁寧に読んでくださると最後のほうにも書いてありますから あとでぜひ読んでください。

(伊佐須美神社と古事記)

それからもう一つ古いものがあります。レジュメの歌詞を見てくださいませんか。伊佐須美神社の田植歌。「催馬楽」と呼ばれますけれども、6行目ですね。

【太神宮のめさうとて つなぎおきたる御座船】とありますね。

数を数えてください。

【太神宮の】五、【めさうとて】五、【つなぎおきたる】七、【御座船】で五。

五五七五なんですよ。最初の言葉が五五というのは、実は日本で最も古い歌詞の形です。五五調というんですけどもね。飛鳥から奈良時代に歌われた歌は五五調なんです。

古い証拠に、古事記のコピーを取ってきました。左のページの上、漢字だけで書いてあるもの、これは原本です。稗田阿礼という人が暗誦したものを太安万侶が書き取ったんですね。伝わったばかりの漢字の音の発音だけを使って書きました。今は漢字に意味がありますけども、この当時はまだ漢字の意味はありませんでした。それを日本語らしく書き改

めたのが下の段の文章です。その中の左のページの（２）のところを見てください。こういうことがあります。

天神が命令したというんですね。伊邪那岐命、男の神様と伊邪那美命という女の神様に向かって日本の国を作りなさいと命令するんですね。２人は天浮橋、今で言えば虹でしょうかな、おそらく降りてくるんです。ところが日本の国はまだどろどろした海で降りることができなかつたんですね。それで持っていた矛を突き刺して、くるくるっと回して持ち上げたら雫が立ったと、その雫が島になったと。淤能碁呂島という島になったというんですね。

伊邪那岐という男の神様がここで伊邪那美に向かって言うんです。

「私の体は立派に成長したけれど、一か所だけ余って突き出ているところがある」と言うんですね。そうすると女の伊邪那美の神様は、「私の体も立派になったけれど、まだ塞がらないところがある」と言うんですね。そうすると伊邪那岐はじゃあ、その塞がらないところに私の余ったものを差し塞いで国を生みましょうと。

柱を立てて左から男の神様、右から女の神様が回ります。このとき日本はまだ右のほう在上位だったんです。ところが左から男が回ったということは、この当時すでに左が上位、上の位だったということが分かりますね。昔の大臣、左大臣と右大臣では左大臣が格上ですね。それは中国からの伝来なんです。以前は日本では右が上だったんです。

男の神様が左から、女の神様が右から回って出会ったところで、何というかというと、まず女の神様が「美哉好少男を」というんです。「素敵なお兄ちゃんね」、今の言葉でいえば「あら、イケメンなお兄ちゃんね」ぐらいな話を一言触れて、男の神様が「美哉好少女を」、「きれいな方ですね」と。それで交わって国を生んだんですね。

ところが昔田んぼにいましたねヒルという血を吸う動物が。あのようなグニョグニョした島が生まれたんですね。こんなはずがないということでもう一度同じことをしたんですね。今度は洗濯の泡みたいなものが立ったんですね。それでこれでも使い物にならないということで、天に帰って聞いたところ、女の神様が最初にプロポーズしたからダメなんだと。そしてやり直すんです。そして男の神様が先にプロポーズをしたら立派な国が生まれた。

それが淡路島ですね。その淡路島に鶴鴿石という高さが50cmぐらいの石があるんです。そこに紅白の綱が付いていて、この綱をカップルで引っ張ると結ばれるという伝説があって、行列しています。なぜ鶴鴿石というかといいますと、最初どのようにして国を生んだらいいかわからなかつたんです。交わり方を知らなかつたんです。そしたら鶴鴿というつがいの鳥がこの石の上にとまって交わった。あ、その通りにやればいいんだなということで真似たら島が生まれたという伝説があります。

この石に形が非常によく似た岩を伊佐須美神社の太々神楽の時に、天地開闢という演目があるのですが、その時にこの作り物を正面に出すんです。そしてそれに向かって口上を述べるんです。つがいではありませんが、鶴鴿を一羽乗せてあるんです。古事記そのもの

が太々神楽に出てくるんです。福島県の太々神楽は120箇所ぐらいありますけれども、その中で石らしきものを出すところがありますが、伊佐須美神社のような作りものではなく、小さな箱に紫の風呂敷を乗せただけです。それ以外のところはありません。伊佐須美神社がいかにか古事記に忠実に小道具を作っていたらということがよく分かりますね。そういう形がこの会津美里町に残っているんですよ。これはまさに驚きですね。

（伊佐須美神社の御田植祭）

伊佐須美神社の御田植祭に佐布川という地区から早乙女踊りが奉納されます。不思議なことに気づいたんです。何かと言いますと、歌詞です。

【春は子の日の吉日 よい日によい日を選んで】と書いてありますね。この歌詞で歌い始めるんです。早乙女踊りは会津地区だけで42箇所かつてありました。今はだいぶ減りました。ほとんど同じ歌詞を歌っています。

【舞い込んだよ 舞い込んだ 千秋楽で良いとな 一番目の申し御子は、「申し御子」というのは神の子という意味です、侍方になられた 二番目の申し御子は商人方になられた 三番目の申し御子は百姓方になられた】とありますね。百姓が一番金持ちになったという歌詞です。農民の歌だからそういうことなのでしょう。ほとんど全部、佐布川以外はこの歌詞なんです。前半と後半が逆になったものはありますが基本的には同じです。

なぜ伊佐須美神社だけ違うのかと不思議だったのですが、高田町史、旧高田町の歴史を編纂するときふと思いついたんです。ナガミネさんという長く佐布川の早乙女踊りに携わった方に聞いたら謎がとけるかなと、尋ねましたら彼はこうおっしゃいました。昔は確かに今のような一番目の申し御子は・・・と歌っていたと言って歌ってくれました。間違いなく佐布川でも昔は会津一円と同じ歌詞で歌っていた。ところが古川與市という方が、高田においでになりまして、この方がちょっとこの歌詞では神社に奉納するには寂しいと言って改作したんです。それを今歌っているんですよ。これは単なる思つきで作ったのではなく実に立派な歌詞ですね。

なぜ作り直したかという、大正の頃に、本来早乙女踊りというのはお正月に一軒一軒回って歩いて神棚の前で豊作を祈って踊るのが田植え踊りの形ですが、大変なもんですから御田植祭でやったらどうだってことになって、一軒一軒回ることをやめてしまってお祭りだけに奉納するようになったんです。伊佐須美神社というのはこれだけありがたい神様ですから、昔の歌詞では失礼ではないかということで作り直したんだと思います。古川與市、この方は管楽をよく勉強された方のようなので、だいたい作り直すと悪くなるのが普通なのですが、この歌詞は驚くほど立派です。

こういう芸能というのは伝わるたびに段々洗練されて、振りが付いて美しくなっていくんですよ。その点では会津の早乙女踊りの中で、佐布川の踊りの演目が7つになって振りが美しくて綺麗なものに洗練されました。これが中通り、県北に行って、それから浜通りまで行くんです。県北に行くと踊りが23種類になります。浜通りに行くと7種類から8種

類の踊りに減ります。しかし振りがなお美しく磨きあげられまして、しかも着物がこのような浴衣じゃなくて留袖を着るんです。留袖を着て田植えをするはずがないでしょ。なぜ留袖を着るかという、親は娘が嫁に行くと必ずどんなに貧しくても留袖と喪服を持たせたんです。持たせなかったら恥ずかしかったんです。みんな持っている。それを息子が借りるんです。もっとも豪華な着物です。こんなに豪華な着物を着て田植え踊りをやるんだから、ぜひ豊作にしてくださいという強い願いの現れです。こういうことで、どんどん変わっていきます。

（高田の子守歌）

高田の子守歌。雀林で録音した子守歌です。これはだいぶ昔から知られておりました。仙台で音楽の教師であった竹田忠次郎先生。この方の娘さんは民謡歌手の原田直樹さんの奥さんです。NHKと協力して録音機を持って、その当時の録音機ですね、テープじゃありません。円盤そのものに直に録音したんですね。リヤカーひとつくらいの重さだったそうです。それを持って東北地方を歩いて音を録ったんです。その中に、この高田の子守歌が入っているんですよ。あまりに美しいもんですから本当に気に入りましたね、なんとか直に地元の方に聞きたいなと思って30年以上40年近く探していたんですが、どうしても出会えませんでした。それで震災直前です。たまたま雀林一丁目に行ったときに、調査が全部終わって帰る間際に、おばちゃんでしたけど「おばちゃん、昔の子守歌知らない？」といたら「ああ、知ってるよ」とあっさり言われて、録音できたんですね。それがここの楽譜にある子守歌です。

子守歌っていうのはだいたい肉親が歌いますね。まずはお母さん、それから兄弟、特にお姉さんとか。愛情たっぷりに歌うんですよ。きれいに歌うとか上手に歌うなんてこと全く意識ありません。心を込めて可愛くて可愛くてしょうがないという気持ちで歌うんですね。それがよく出ているんです。歌詞を見てください。

【ほらねろほらねろ ほらねろやや】よくよい子だよい子だねんねしろって普通言いますね。それにちょっと節が付いたような感じです。

【ねんねろねんねろ よぐねろやや】言葉にちょっと節が付いたような、正式な子守歌になる前の原型に近い子守歌ですね。そのほうがはるかに愛情を感じ取れますね。

会津美里町の小学校の子供たちに全部教えたいんですけどね。本当にきれいですよ。愛情たっぷりです。シューベルトの子守歌もモーツァルトもブラームスも敵わないと思いますよ、この歌には。そのぐらいきれいな、愛情をこめられた子守歌です。これが高田にあったということはすばらしいですね。一般には、江戸の子守歌といって江戸で流行ったものが地方に入ってきて多少変わりましたが基本的にはこれです。これとは全然ちがう。そういう歌がここにあったんですね。これも奇跡ですね。

（会津美里町の誇り）

会津美里町には古いものが、しかも単に古いだけではなくて非常に価値の高い、くどいようですが今の子守歌も歌になる前の形ですよ。原型です子守歌の。それが残っているんですね。原型ってことはまさに愛情たっぷりの歌だということです。そこを大切にしたいですね。その原型、元々の初源的なといきましょうか、最初の形をしっかりと押さえていただければね 継承していくにしても間違いは起きないということは言えると思いますね。

こういう歌が残っていること、どうか会津美里の方は誇りに思っ受継いでいただきたいと思います。

＜川延コーディネーター＞

懸田先生ありがとうございます。会津美里町の伝統文化に対するそれこそ愛に溢れたメッセージだったと思います。ぜひ、そのおばあちゃんの歌を一度聞いてみたかったなと思いますね。

では、続いて、今の先生のお話を伺っての所感なり、現在ご自分達で関わっておられるジャンル、いずれでも構いませんけれども、まず梶原さんから少しお話いただけますでしょうか。

＜梶原館長＞



紹介いただきました梶原圭介と申します。どうぞよろしく願いいたします。

ここにもプロフィールのところにありますが、会津美里町の郷土資料館というのがありまして、会津美里町の新鶴地区に、昔の新鶴村の役場の建物があるんですが、その中を改装しまして今資料館として運営しております。

資料館はちょうど2年前の令和5年の10月1日にオープンしたところでありまして、ちょうど2年とひと月経ったところになりますので、まだまだ新米の資料館ではあるんですけど、もしまだいらっしゃったことない方がおられましたら、ぜひいらしていただければありがたいなと思います。

資料館って言いますと、一般的に古い時代から歴史の年代に追って説明していくところが多くあるパターンかと思うんですけども、それではなかなか面白くないところもありましたので、資料館を作る時に色々検討委員会なんかもあって、ずっと考えてきたんですけども、まず町内美里町にお住まいの方には、やっぱり美里町をよく知ってほしいというところ、あとは美里町の子供たちに町の自分のふるさとのことをよく知って成長し

ていってほしいというところ。子供たちもいずれは進学だったり就職だったり町を離れる場面があると思います。その時にやっぱり離れた時に自分の町はこういう町だっていうことを堂々と言えるぐらいになってほしいなという願いもありますので、まずやっぱり大人も子供も大人ももちろんそうなんですけども、町のことをよく知ってもらいたいというところで町内の方にはそのような思いの資料館にしております。

あとはもちろん観光とかで美里町を訪れる方もいらっしゃいますので、そういう方には美里町はこういう町なのかと、会津って言うと会津若松市がやっぱりどうしても一大都市ですので、会津若松っていうのはよく知られているかもしれませんが、そのすぐ隣の西側にある会津美里町はこういう町なのかっていうのを知ってもらえるような、そんなような資料館で訪れていただければなあなんて思った展示を展開しております。

いろいろここで言ってもあれなので、ぜひ一度見に来ていただければありがたいなという風に思います。という施設で今、館長を務めております。もともと役所の方に文化財の専門職ということで雇用されましたので、ずっと文化財のことでやってきておまして、合併してちょうど今年で会津美里町になって20年なんですけれども、ようやくそういう町のことを紹介できる施設ができたな、というところでやっております。まあそういう施設ですので、是非おいでいただければと思います。

今日ですね今回の会津塾で、こういうテーマでやられるということでお声がけいただきまして今ここにおるわけなんですけども、美里町文化財の仕事をしておりますので、もちろん町にあるいろんな有形、無形の文化財、あと埋蔵文化財等々いろいろありますが、そういうのを幅広く仕事としてやっております。

今日は会津美里町と会津の民俗芸能というテーマになっておりますので、まずは会津美里町の民俗芸能の状況をここでちょっと皆さんに知っていただければいいかなと思います。あとは今後どうして行こうかという、会津美里町の現状について話せばいいかなと思っております。

会津美里町の中で、役所ですので文化財として指定しているか、してないかなんて話をよく聞くかと思えますけれども、指定しているからすごく指定してないからすごくないとかそういう話ではなく、もちろん指定していなくても大事なものとか地域にとってはずっと大事に継続されているものももちろんございますが、今のところ町として指定がかかっているものが、この11件になっております。

(会津の御田植祭)

まず①番からいきますと、会津の御田植祭ということで、先ほど懸田先生もいろいろお話いただいておりますが、これがまず国の文化財として指定されているものになります。あとの残りの10件は、町の指定になっておまして、このような指定の状況になっているところです。会津の御田植祭は、もともとは県の指定の文化財だったのが国の方で認められて国の方で指定になっています。美里町においては、伊佐須美神社の御田植祭のところ

ではありますけども、指定の名称としては「会津の御田植祭」ということになっておりまして、喜多方市に慶徳稲荷神社というのがございますが、その御田植祭と合わせての指定になっております。それで「会津の御田植祭」という名称で指定になっております。文化庁の先生によりますと、御田植祭としましては、日本での一番北限になるそうなんです、会津は。厳密には喜多方のほうが美里より北なので、慶徳稲荷のほうが最北になるのかもしれないけれども、会津という一つのくくりでしていただいたので、一応最北の御田植祭だということ。そういうところが文化庁としても、北限とか南限とか、どこまで広がっていたかというところが、やっぱり文化財の分布として大事なところなので、そういうところに注目されたというところがございます。あとそれぞれ町指定が10個あるというところになります。1つずつちょっとどんなもんかを写真で紹介していきたいと思います。

先ほど映像で見たやつになります、会津の御田植祭です。伊佐須美神社の御田植祭はもちろん伊佐須美神社の行事ですので、いろんな行事が期間中行われるわけなんです、一番メインの御田植祭の様子がこれになります。

先ほども映像であったものになります。神社の行事としては、一応メインの行事は7月12日朝からやって、実際やるのは午後3時頃の行事ですけども、ずっと朝からいろんな行事が7月12日はあって一応メインの日になっておりますが、御田植祭といたしましては前日の7月11日から次の日の13日までの3日間が一応期間になっておりまして、どうしてもメインがこの日なので皆さん見学の方もカメラマンの方も12日に皆さん集まるわけなんですけど、行事としては11から13日に行われているものになります。神輿の行列ですとか、田植え人形なんて言っている、地元で「デコ様」と言ったりしますが、こういうのを持って。これ持っているのは高田中学校の生徒ではあるんですけども、学校の方としましては地元の伝統行事に参加をするという位置付けで、学校の行事の一環として子供たちも出ていただいております。これは田んぼを清めているような意味合いの行事がこの状況になっています。この後に田植えをするということで、田んぼを清めるという意味合いのある行事です。

（佐布川の早乙女踊り）

これも先ほど映像がありましたけれども、佐布川の早乙女踊りということで、御田植祭と合わせておこなわれているものになります。佐布川という地区がございまして、その地区で伝わっている行事になります。後ろにギャラリーの方が写っておりますが、やっぱり昔は結構多くの方が来ていたのかなんていう風に思います。伊佐須美神社の御田植祭は曜日に関係なく日にちで決まっておりますので、年によっては当然平日になる日の方が多いわけなんですけれども、昔は本当に多くの方が見に来ていただいていたのかな、なんていうところがあります。

今日はこれからいくつかいろいろな写真が出てきますけれども、昔の結構平成初め頃の写真を持ってきております。いろいろな古い本に載っている写真から引っ張ってきております。昔はこんなに人いたんだとか、こんなところでやっていたんだなっていうのがあったので、紹介をしようと思っております。

(高橋の虫送り)

「高橋の虫送り」という行事があります。虫送りの行事って農業に関わる行事ですので、あちこちに伝わっていたり、今でも行われたりするんですけど、だいぶ行われなくなったという風になっています。田んぼとか畑でやっぱり虫がいて、いわゆる害虫になるわけで、農作物の生育にいろいろ支障をきたすので虫を殺さざるを得ないわけです。それでそれを供養するという意味合いの行事で、特に農村部では行われているわけです。

高橋という橋が会津美里町にありまして、その橋の前後の集落で虫送り行事をやっている、高橋というの橋のところで供養をしているという行事で「高橋の虫送り」と言っております。こういう虫かご、右上の写真は虫かごを作っている様子になりますが、木の枝とか葉っぱとか、そういうのを用以ていわゆる虫かごを作って、その中に虫を集めて、最後は川に落として流すんですけど、流すことで虫が死ぬということで、農作物の害を防ぐというようなそういう意味合いがあつて。当然虫を殺してしまうので供養する、お坊さんが来てお経をあげて供養するというような、そういう行事になっています。

この写真も平成の初めか昭和の終わり頃だと思うんですけど、子供たちもたくさん出て、賑やかにやっている様子になります。やっている時期が、7月の土用の丑の日なので、夏の暑い時でもありますし、虫がいっぱい出る時期でもあります。あとは農作物が一気に成長する時期でもありますので、そういうタイミングで、やっぱり農業の1年の田植えから収穫までの一連の中での1つの大事なポイントとなる時期に行っている行事なのかなと思います。

やっぱり今はどうしても、農薬とか、田んぼの農作業もだいぶ昔より変わりましたので、こういう行事だけが特化して残っちゃってですね、農業のこととあんまり関係が薄れてきちゃったっていうのもあつて、行事をするための行事みたいになっちゃっているところがあつて、地元でもやるのが負担になっているというような話があつて、一旦もう終わるような話も出たところがあります。

もともとやっていた保存会が解散してしましまして、そうはいかないよねということで有志の方が立ち上がって、今また引き続き継続してはいるんですけども、ただ有志の方も決して農家さんではないですし、農家の方も別にこれをやるために農業をやっているわけでもないの、なかなか日常と行事がリンクしなくなっているというのが、これに限らず、そういう民俗芸能の置かれている状況なのかな、なんていう風に思う1件ではあります。

(彼岸獅子)

次行きましょう。「彼岸獅子」です。会津あちこちで彼岸獅子の行事があります。会津の高田のほうですけれども彼岸獅子が一つ残って伝わっております。

これも踊り手3人はもちろん必要ですし、後ろにありますけど、笛を吹く方とか太鼓を叩く方、あと手前に小道具を持つ方とかいろいろ役割があって、踊るばかりではないわけなんですけども、なかなかこの彼岸獅子も今も団体はありますが、なかなか存続が今後危ぶまれているのが実状であります。と言いますのは、踊り手が3人必要で、保存会があるんですけども、踊り手がまさに今3人しかいない状況になっております。実際踊るのってなかなかの体力も必要ですし、本当は複数入れて交代で舞ができればいいんですけども、他のスタッフがないということで、本当に3人でもう目一杯でやっているっていうのが現状になります。

毎年3月のお彼岸の時期にやりますが、会津あちこちでもやっておりますけども、このやつももちろんお彼岸にやるんですが、今年の3月は実は開催できなかったんです。と言いますのは、この3人のうちのお一人が、どうしてもお仕事が休めないということで、今年のお彼岸の春分の日って多分土日とかじゃなかったんですよね。そういうお仕事されている方で、どうしても祝日とはいえ休めないということで、3人揃わないということで、今年は実施を断念したということになってしまいました。踊り手が何人かいれば交代要員でできるわけだったんですけど、それもちょっと今ままならなくなっちゃっているっていうのが実状です。ただもうやらないかという、そういう話ではなくて、当然来年また3人ちゃんと踊り手がいれば、揃えばちゃんとやるわけなので。練習はもちろんしていただいたので、もうダメだっていう話ではないんですけども、また今年はそのようなことがありました。

(太々神楽)

「太々神楽」になります。これもよく神社で神楽の奉納とかあつたりしますので、あちこちで見たことある方いらっしゃると思いますけども、伊佐須美神社で活動されている御神楽の団体になります。これも神楽の舞も何種類もありますし、動きもあつたり、舞う方ももちろん必要ですし、笛、太鼓とか、そういう舞手以外の人も必要なもので、こういうのも人手が必要なんですけれども、なかなか次の担い手がないというのが現状になります。

今、確かにメンバーもギリギリではあるんですけども、皆さん熱い方が今ちょうど揃っておりますので、今日もメンバーの方がこの会場にいらっしゃるんですが、熱い方がいらっしゃるの、今なんとかやっていたいておりますけども、これも大事な行事なのかなと思っておりますので、ぜひこういうのも続けていくことが大事な部分ではあります。

(高田甚句)

「高田甚句」という、いわゆる音曲になります。一般的には盆踊りの時の盆踊り歌になるわけなんですけども、この美里の中では何とか甚句ってことで、いろんな甚句があって、盆踊りとか、あと9月に法然踊りみたいなことでやぐらを組んで踊りを踊っていたりするのがありますが、指定文化財としてやっております。会津高田にお住まいの方は写真を見て、あれ?と思うかもしれませんが、これ高田の町中でやっているんです。右側にパーラーこばやしさんの店舗が見えますが、国道401号の商店街の通りで昔はやってたのかなってというのがこれでわかるわけで、今と開催している場所が違うわけなんですけど、こういう写真で昔はこうだったのかなんていう風に思ったりするので、写真も結構記録として大事なのかなというのを思ったところではあります。

あとこの後、甚句の指定がまだ出てくるんですが、こういう地元で伝わっている盆踊り歌っていうのも何気なく皆さん地元の方は、お盆になったらみんなふるさとに地元に戻ってきて、盆踊りに参加されたりするんですけども、やっぱりこういうのっていわゆる音楽ですので、楽譜にしてちゃんと伝わるように正しくメロディとかテンポとかが伝わるようにしておくことって大事なのかなと思うところがあります。

(へびの御年始)

「へびの御年始」という行事があります。

先ほど子守歌の話が出たのと同じ集落で、雀林という集落がありますが、そこで伝わっている藁で作った蛇を奉納する、法養寺というお寺がありますが、そこに奉納する行事になります。これは毎年曜日に関係なく1月7日に行われている行事で、江戸時代に水不足で困った時に、竜とかそういう水の使いみいたいところがありますので、そういうのを模して作ったところが始まりだという風に言われております。

地元の子供たちがこれを担いで集落の中を練り歩くという行事になります。蛇を作るのは下の写真にありますように地元の方々が蛇を作って奉納するわけなんですけれども、子供たちが担いでいくという子供たちの行事なんですね。正月明けの1月7日の行事ということで。写真ですと古い写真なので、まだ雀林に子供たちがいっぱいいた時代の写真なのでいっぱい写ってます。

今はほんとに雀林の集落もだいたい80軒から90軒ぐらいあるそうなんですけれども、子供の数がもう数名、一桁だという風に聞いております。雀林の出身だった方が別のところで暮らしているところの子供を連れてきてやっているなんて話も出ているぐらい、今子供が少なくなっちゃったんですけども、いないわけではないのでやっているんですが、このようなことで子供たちの行事として伝わっているものになります。

あまりこういう行事がないのでちょっと珍しい行事としてNHKなんかで毎年ニュースで放送されていたりします。

(せと市)

次は「せと市」ということで、会津本郷焼のせと市になります。これも早朝にやるのがせと市の行事なんですけれども、なぜ早朝にやるかって言うと会津の河東の冬木沢詣りとすごい関係してるというところが、せと市の起源になります。今は本当にいわゆる瀬戸物市のようになっちゃっている感はあるんですけども、なんで朝やっているのかとか、何でこの本郷の瀬戸町の通り沿いでやっているのかということ考えると、やっぱりそういう単なる瀬戸物市じゃないよっていうところも、きちっとやっぱり伝える必要があるのかなと思う行事になります。

(本郷の甚句)

先ほど高田甚句がありましたが、本郷にも甚句があって、一応町の指定にはしているところです。本郷もやぐらを組んでお盆の時にやるわけなんですけども、この写真は結構古いんですけど、やっぱり大勢の人が皆さん集まって踊っているのかなというところになります。町が指定しているのは高田甚句と本郷甚句ではあるんですけども、他にも町の中には甚句がいっぱいあるので、そういうのをきちっと整理して甚句の調査もきちんとしていかなくちやというところは思っているところになります。

(本郷餅つき唄)

「本郷餅つき唄」というのが本郷にも伝わっておりまして、結婚式とかおめでたい席の時に、こういうようなものをやっていたというところがあります。今は実際もうほとんどやられてないわけなんですけども、年配の方が歌えたり、やったことがあるっていう方がまだいらっしゃるので、かろうじてってところはあるんですけど、こういうのも本当はきちっと動画とか撮っておく必要があるのかなんていう風に思っているところになります。

(花まつり)

「花まつり」という行事がありまして、お釈迦様の誕生日を祝う行事で4月8日に必ずやっています。会津若松市内だとお寺の行事としてやっているところがあるかと思えますけども、ここは新鶴に田子薬師堂というお堂がありまして、そこでやっている行事になります。地元の方が区長さんなんか中心となって、子供たちがこういうのを担いで集落の中を練り歩くというのがあります。この御神輿みたいなものの真ん中にお釈迦様が乗っております。花祭りなので、それを担いで甘茶を注いで最後やるということで、いわゆる行事としては花祭りではあるんですけども、お寺とかではなくて地元がやっているっていうことが、ちょっと大事なところかなということ指定をかけているところになります。会津美里町の文化財の紹介としては、そのような形になるのが11点ですね。

(会津美里町の伝統芸能の現状と課題)

伝統芸能は今後継者がいないとかいろんな問題があります。じゃあどうすればいいかっていうことを考えていかなくちゃならないんですけど、まずはやっぱり継承者がもういない、やる方がいないということになっておりますので、じゃあどうするかというところを考えていきたいというところがあります。

極端なことを言えば、伝統芸能がなくても生きていけるわけですね、我々は。でもなんでこういう行事が昔から伝わってきたのかってことを考える必要があるのかなというところ。やっぱりなじみが薄くなっちゃっているって言うところなんです。特別な行事だということ。普段の生活の中に当然もう入り込んでないので、やっぱり特別な行事だから負担になっちゃう、みたいなそういうことになっちゃっているんで、そこは逆手に取ればどうするかってことで考えます。一部の人だけでやっている、先ほどの高橋の虫送りが有志の人が再興したと言いましたけれど、結局もうできないでしょうって言う人からすれば、「あの人がやっていたのね」って話になっちゃうので、だから有志だけがやるっていうのも決していいとは言いきれないという風に考えます。先ほども言いましたけど普段の日常生活にやっぱり全然入り込んでないので、関われる場面がどうしてもないですね。行事も年に1回ということが大半ですので、なかなかないということになっちゃいます。

これはちょっと大きいのかなと思うのは、子供の時になかなかそういう行事に触れていないということ。地元でやっていたって、やっぱり子供時代ってどうしても親の意向があったりするんで、そんなの行かなくていいよって言われちゃえばそれまでかもしれないので。なかなか子供の時にそういうことを見たり、あと実際に自分がやってみたり、作ってみたり、例えば虫かご作りにちょっと参加したとかですね、そういうことがないと子供の時に頭の中にインプットされないのかなっていうのを感じます。

ここについては、今考えるのは、やっぱり小学校・中学校と連携できないかなということ、今ちょっと画策をしているところになります。

あとは行事本来の意味を知らないということですね。本当に昔からやっているからということで、ただ単に繰り返してやっているっていう事ですね。先ほどせと市のことでちょっと言いましたけれども、単なるせと市ではなくて冬木沢詣りとの関係で始まったっていうのがあるんですけど、「へえ」っていう方はお調べいただければと思いますが、やっぱりその行事が始まった大元ってあるはずなんですよね。やっぱりちゃんとそういうことを知っておく必要があるのかなということがあって。

あとは義務的にやっているということがあって、負担になるってさっき私言いましたけれども、行事だけがもう特別扱いされちゃっているんで、日常生活の中に入り込んでないので、義務的になっちゃっている。よくあるのは地区でやっているやつなんかは、区長さんが音頭取りしなくちゃならないので、区長になったからやるしかねえんだ、みたいな話になったり、前の区長から引き継がれたからとかになって、もう半ば義務的になっちゃっている。そうすると負担だったり苦痛だったりするので、そうするともうやめるかみたいな

話になりかねないので、そういうところを何とかしていきたいなっていうのを考えているところになります。

私は役所に勤めている側なので、バックアップしかできないわけなんですよ。じゃあやれよって言われてもなかなか当然できるわけではないので、バックアップをして、いかに伝えていくか、次の世代へ持っていくかってことを考える立場ではあるので、現状を踏まえてこういう風にして何か糸口、突破口がないかなんていう風に常に考えてるわけなんですけど、この矢印の右側は今空欄ではありますけど、この辺をじゃあどうするかってところが 今後の今私なりに考えているところです。会津美里町の文化財の紹介と現状についてご報告ということできさせていただきました。ありがとうございました。

＜川延コーディネーター＞

梶原さん、ありがとうございました。こっちの右がないというお話でしたけれども、今日の会津塾は、先ほどの1部とこの2部は、実は全く切り離されてるわけではなくて、あえてこういう構成にしているんですね。

1部で大友さんだったかな、リブランディングというお話をなさっていました。まさにああいう発想にすごくこの右側のヒントが込められていると思います。あと斉藤さんはボランティアの力っておっしゃっていましたよね。まさしくこれボランティアの力以外ありえない話だと思っています。

すごくキーワードとしては、懸田先生がおっしゃっている緒言性がある、行事本来の意味とか、そういうことを超えて、人間の優しさとか生き物を大事にする気持ちとか、それはあの豊作とかそういうことを超えて、なんか生き物としての根源的な物っていうところが本来的に伝われば、ボランティアっていうスピリットにもすぐ結びつくんじゃないかなって思いました。では大里さんお願いします。

＜大里主任学芸員＞

福島県立博物館で民俗分野の学芸員をしております大里と申します。どうぞよろしくお願いたします。

「博物館」というのは、その漢字の通り、「博」（ひろし）という漢字の後に、「物」があります。物を「ひろく」集めるというのが博物館なんですね。

（虫送りの藁人形）

今日は会津美里町に関するものということで、収蔵資料の中から、実物を1点持ってきました。先ほどの梶原さんのお話にもありましたけれども、これは会津高田の下町で伝えられていた「虫送り」という行事の、1988年（昭和63年）に作られた虫送りの藁人形です。袖のところにひらひらが付いているんですけども、何が書いてあるかと言いますと「豆の虫送れよー」「稲の虫送れよー」「こどもの泣き虫送れよー」とありまして、本当

の虫ではないわけですね。マジカルな虫も一緒に送ってしまう。あとは「タバコの虫送れよー」というのはこれは禁煙を祈ったものではありません。

昔、福島県は大変なタバコの葉っぱの名産地でもあった。タバコの作物として虫がつかないように送れよーと、いわゆる害虫であるとか子供の泣き虫であるとかそういった悪いもの、それを虫ととらえて、この藁人形を「デコ様」とも言ったんですが、それを村外れに送って燃やすとか川に流す、という行事です。



(かたち・ことば・ころ)

博物館は資料として実物を集めてはいるんですけども、民俗資料に関しては、こういった有形のものだけでは本当にその意味を真に伝えることにならないんですね。博物館の民俗資料というのは、国宝になるような、例えば有名な武将が書いた古文書ですというようなものではないし、あるいはお金持ちの大商人が持っていた素晴らしい美術品である、といったようなものでもない。生活道具なんですね、みんな。

民俗資料というのは、民具と言われますが、その定義は身の回りにある、身近にあるという意味の「身近卑近の道具」であると言われていています。ただそういったものでも価値がある、というのは、それは地域の人々の生活の文化を示す資料だからなんです。そういった点で、あくまでも実物資料を博物館は集めるんですけども、民俗学で大事に考えているのが「かたち・ことば・ころ」なんですね。

これはもう民俗学を作った柳田國男が似たようなことを言っています。博物館に収蔵される「かたち」（有形の資料）だけではなく、それにまつわる人々の「ことば」や「ころ」というような部分は、先ほど懸田先生からは町内の雀林地区のおばあさんに話を聞いた、というような話もありましたけれども、本当に地域住民の皆さんでないと分からない部分がある。そういったものを明らかにしていくのが民俗学の聞き取りといった、地道な調査なんですね。そういったところから無形の文化、少し民俗芸能というテーマからは外れますけれども、伝統的な暮らしの中にあつた無形の生活文化についても話をできればと思っております。

民俗芸能に近いものですが、この「虫送り」行事にも、ちゃんと歌が伴っているんですね。それをご紹介したいと思います。お配りしたのはこの『ふくしま藁の文化』という当館の図録ですが、会津美里町に関する資料は19ページと20ページに載っております。当館にある会津美里町関連の資料もいろいろありますけれども、先ほど梶原さんのお話に出て

きた「蛇の御年始」も以前は常設展示しておりました。ただやはり先ほど言った、「かたち・ことば・こころ」です。実物資料として博物館では展示できるんですけども、その伴っている言葉であるとか地元の人たちが大事に伝えてきた心であるとかも、地域の文化として総合的にとらえることが重要なのであって、こうして「かたち」が残っているのは幸いですけれども、「ことば」や「こころ」も含めた、地域のいきいきとした文化を伝え残していくことは難しいことなんです。この虫送りについては歌もご紹介をしたいと思います。

近年、目黒稚子さんと高橋富子さんという方が『会津のわらべうた』という本を歴史春秋社さんから出されました。地域の伝統文化をこういったわらべ歌を中心にまとめて残しておられます。この中にですね、ちゃんとQRコードもありますが、歌がちゃんと残されているんですね。ぜひ興味のある方はこちらをご覧くださいと思います。

虫送りについては「稲の虫送れよ一、ほ一」という歌と一緒に伴っていたんだと。あくまで博物館は形が残っていますが、でもその言葉、歌がどういう歌詞だったのか、あるいはその節回しはどうであったか、すでに失われてしまった行事は特にそうですが、そういったところは、本当に懸田先生のご研究の蓄積というものが、今後も本当に福島県の歴史を伝えていく上では重要な資料になるものであろうと思います。本当に民俗資料というのは「かたち」を残すだけではなくて、「ことば」と「こころ」も一緒に残しておかないとその意味が失われてしまうということ、揃って残すことが重要なんだということです。

今日は会津美里町にかかわる資料ということで、当館の虫送りの藁人形と、この会津のわらべうた、目黒稚子さんたちのご著書と取り組みについてもあわせてご紹介をさせていただいたところです。あとは、いろいろとございますけれども無形の生活文化という点では手仕事というのも関係するかと思います。

お配りした『ふくしま藁の文化』の図録からですが、この近くですと、会津若松市北会津町の下荒井虚空蔵堂には「ケンダイ」という、巨大な渦巻きのしめ縄が飾られます。同じ集落の、ある個人宅でも、正月には毎年渦巻き形の「ケンダイ」という不思議な形のしめ縄を代々作っていたそうです。ですがこの個人宅の「ケンダイ」は、その家のおじいさんが先年、亡くなって絶えてしまいました。様々な生活文化というものがそうして日々失われつつあるんだということです。

(会津まほろば街道)

これがちょっと言いたいなと思ったんですけども、名付けて「会津まほろば街道」という道が会津美里町・会津坂下町・喜多方市にかけて通っています。日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の晩年の歌の中の言葉として、古事記に「大和は国のまほろば」と載っていて、「まほろば街道」もそこから取られているのですが、大和といったのは奈良県ですね。実はその奈良と会津というのは結構近いところがある。会津地方の酒蔵の中にも、先祖が奈良にルーツがあるというところもいくつかあります。奈良と博物館と言いますと、

モノを残すという点で東大寺の正倉院に関して、博物館業界ではよく紹介される森鷗外の歌があります。正倉院は勅封ですので、毎年の風通しのための鍵の開け閉めも厳重に行われます。その開封の際に、森鷗外が帝室博物館総長として立ち会った時のことを詠んだ歌で「夢の国 燃ゆべきものの 燃えぬ国 木の校倉の とはに立つ国」というのがあります。正倉院は校倉（あぜくら）造りと教科書でも習うわけですが、奈良時代に造られた木造の正倉院が、あまたの戦火や災害をくぐり抜けてよくぞ今まで残ってきたものだ、という感慨を詠んだ歌です。

一方で、懸田先生のお話にもありました、民俗芸能にも古いかたちがこの会津の地には残っているという。また地域おこし協力隊の菅原さんの「にいつるこねくと」の1号ですけれども、地域行事が盛んな町という風に書かれています。会津地方は古い昔からの文化が現在によく残されている土地なのであるということと言えるだろうと思います。

とはいえこのような時代ですので、この会津塾の趣旨もそういったところにあると思いますが、博物館としても地域の文化を後世へと伝えていくために力を尽くしてまいりたいと思います。ありがとうございました。

＜川延コーディネーター＞

大里さん、ありがとうございました。皆さんにだいぶ駆け足でお話いただくことになってしまいまして申し訳ございません。ここで一旦閉じたいと思いますが、懸田先生、最後に一言頂戴できますでしょうか。

＜懸田理事長＞

奈良は国のまほろばって言いますけれども、会津こそが国のまほろばですね。とにかく驚くほど古いものが残っているんですね。繰り返しになって恐縮ですけれども、古ければいいってもんではありません。その中にある何が本質だったのか、何が根源だったのか、それをしっかりと捉えてやるのが、正しく継承するための一つのコツっていいでしょうか、鉄則だと思いますのでね、今後ともよろしくどうぞお願いいたします。

＜川延コーディネーター＞

はい、ありがとうございました。皆様もどうもありがとうございました。この後 交流会も設定しておりますので、もしよろしければそちらでも講師の先生方にいろいろお尋ねいただけたらと思います。

最後に先生方に拍手でお願いいたします。ありがとうございました。

◆◇◆ 第2分科会 (テーマ:地域づくり) ◆◇◆

福島大学「ふくしま地域政策研究会」とのコラボ企画

「人口減少下だからこそ挑戦する 会津美里と会津の住民自治」

～会津美里町の住民自治の過去・現在・未来～



<パネラー>

渡邊 歩 様	福島県立博物館 学芸員
渡部 朋宏 様	会津美里町健康ふくし課長(博士(公共政策学))
高野 武彦(進行兼務)	福島大学行政政策学類 客員教授

<高野客員教授>

ちょうど時間となりました。

本日の分科会2 (テーマ:地域づくり) 福島大学「ふくしま地域政策研究会」とのコラボ企画、「人口減少下だからこそ挑戦する会津美里と会津の住民自治」～会津美里町の住民自治の過去・現在・未来～ を始めてまいりたいと思います。

改めまして、私、会津地域文化藝術フォーラムで代表理事をしております高野と申します。本日の司会進行を務めてまいりたいと思いますが、もう一つ福島大学の客員教授という立場もごさいます。本日は、福島大学の立場で、皆さんとの議論を進めていきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひします。

最初にお断りいたします。本日は、福島大学行政政策学類の教授で、「ふくしま地域政策研究会」を主宰しておられます垣見教授にもご出席いただく予定でしたが、お身内にご不幸ができてしまい、本日、欠席となりました。非常に残念です。そうしたことから本日は、垣見先生に代わりまして、この第2分科会が私が進行してまいります。皆さま、よろしくお願ひいたします。

(本日の会津塾の趣旨：人口減少問題)

まず、ここから参加する方もいらっしゃるのて、改めて本日の会津塾の趣旨を簡単に申し上げます。

本日のオープニングにあたっての私の挨拶でも述べましたが、今、急激に進む人口減少が大きな課題であることは、全国共通です。特に、会津地域は、昨年17市町村のうち13市町村が消滅可能性自治体と言われました。ここ、会津美里町も残念ながら消滅可能性自治体だと言われてしまいました。

さらに進む高齢化の問題もあります。会津地域は福島県内高齢化率ワースト10に8町村が入ります。会津の14町村が高齢化率40%を超えています。会津美里町も44.3%です。30%台は、喜多方市、湯川村、会津若松市ですが、喜多方市は39.4%でまもなく40%になると思われます。

(「誇りの空洞化」)

一方で、人口減少下には、もう一つの問題があります。一般的には、若者の流出、特に女性の流出で、そこに原因があると多くの人言ひます。福島県でも本格的にこの対策に乗り出してきています。ただ、若者の流出や女性の流出は、事象にすぎません。

問題は、「会津で住み続けていくためにはどうしたら良いのか」ということてです。今、私たちにある問題は、「会津で住み続けていく未来予想図が描けない」というところにあります。

人口減少対策、行政がいろいろと政策をしていますが、その実効性が伴わないてすね。その理由は、いろんな対策をしても、只今申し上げた「会津で住み続けていく未来予想図が描けない」という現実があるからてです。特に、会津に住む高校生や大学に進学した若者が、「会津で住み続けていく絵姿が描けない」という問題てです。それを学術的には「誇りの空洞化」と言ひます。30代以上の方々も、つい「会津には何にもなくて」てて言ててしまいます。生まれ育った地に「住み続けたい」と思えない。それは危機てです。大きな危機てです。今日は、私たちが、これからも会津の地に「住み続けていくこと」をテーマに皆さんと考えていきたいと思ひます。

その「未来予想図が描けない」ところをどう埋めるのか、先ほど「誇りの空洞化」と言ひましたように、埋めなければならないのは「誇り」てです。そうした議論を基調講演のパネルディスカッションでは行ひました。

それを受けて、隣の第1分科会では、民俗芸能、文化という面から、その問題に取り組んでいます。

（住民自治の視点）

この第2分科会では、住民自治の視点から話をしていきます。

皆さん、今の政治や行政のしくみですが、簡単に言うと、私たちの身近なことは、まず、私たち住民が決めます。家族、町内会、会社、地域社会がそうです。それで、私たちが決められないことを、町議会議員を選んで、議会で決定し、町の役場に仕事をしていただく。町でできないことを私たちが選んだ県議会議員が議会で決めて県庁に仕事させる。県ができないことを国会議員が霞ヶ関に行わせる。これが基本です。これを学術的には「補完性の原理」といいます。そして、私たちが私たちの暮らしに大切なことを決めていくことを住民自治といいます。



第2分科会では、この住民自治の視点にたって話を進めていきたいと思います。

その住民自治。江戸時代からありました。

今日は、江戸時代の高田村について研究している、福島県立博物館の渡邊歩学芸員に、まずお話しいただきます。

お話の後に、私と渡邊学芸員が少しやり取りして、渡邊学芸員の研究が今の時代を生きる私たちにどう関係するのか、江戸から令和に話をもっていきたいと思います。

続いて、住民論を執筆された、会津美里町健康ふくし課長の渡部朋宏さんから、お話をお聞きしたいと思います。先ほど、地域のことを決めるのはまず私たち住民だと話しました。ただ、人口がどんどん減少していく。そうしたときに、これからの住民をどうとらえていったらよいのかという視点でお話をお聞きします。

それでは、さっそく、渡邊歩学芸員からお話をお聞きしたいと思います。

<渡邊歩学芸員>

福島県立博物館で学芸員をしております渡邊歩と申します。よろしくお願いたします。

私は、歴史分野を担当しております。

実は、学生時代から会津美里町をフィールドにして研究をさせていただいております。

(本日のお話)

歴史が好きな方はご存じかとも思いますが、「継声館（けいせい いかん）」という昔の学校や「郷頭」という複数の村を束ねる人々を調べている中で、今回このようなお話をさせていただく機会となりました。

一言でまとめると村役人に近いものになると思いますが、「郷頭（ごうがしら）」の視点からお話をしたいと思います。

本日のお話は、まず17世紀後半、具体的には江戸時代後期において、会津藩の百姓の中でも上層の百姓が、藩の支配の中で地域社会に果たした役割について検討していきたいと思っております。

(「郷頭」について)

会津藩には「郷頭」という役職が置かれておりました。上層百姓の中から任じられていました。以下、郷頭に任じられる上層百姓の層を「郷頭層」といいます。

郷頭という役職について整理しますと、郷頭は、全国的には

○郷頭:全国的には「大庄屋」、複数の村を束ねる人々
会津藩においては1300余村を56組にわけた、
各組に置かれる



大庄屋と呼ばれるような、複数の村を束ねる人々で、身分としては百姓でありながら、苗字帯刀を認められるなど、特権が認められ、百姓と武士の間に位置するような存在でした。「中間支配機構」や「中間権力」などと表現される存在でした。会津藩では1,300余村を56組に分けた、各組（約1万石）に置かれておりました。

(郷頭についての通史的な理解)

続きまして、郷頭についての通史的な理解です。

保科正之公が会津に入部以来、村や年貢に関する規定が定められていく中で、郷頭についての規定も定められていきます。その職務がまとめられたのが、貞享二年（1685）に発行された『貞享風俗帳』です。郷頭を含め村役人の職務を調べる際に貴重な資料となります。

郷頭には様々な特権が与えられていきますが、次第に特権は奪われて、天明の改革で郷



頭は廃止されていきます。この一連のながれについて、『会津高田町史』では、「在地の者層を利用し支配に利用しようとしたものの、不正などを理由に徐々に権限は縮小されていく」という趣旨で説明がされています。郷頭の見解については、こうした見解が一般的です。

（郷頭の積極的な評価）

しかしながら、郷頭の廃止後の実態はどうであったのかをみると、制度と実態にはギャップもみられます。制度として廃止された後も実質的な職務があったため、廃止後も彼らが百姓や代官から頼られる様子がみられました。

最近では、郷頭について、積極的な評価をする動きがみられます。「郷頭」の実態について、例えば、酒井耕造氏は、支配の末端としてだけではない郷頭の自立的な側面に注目しています。また、田崎公司氏は、郷頭を再検討する際に、宝暦・天明期の会津藩について、課題への向き合い方に展望を加えるなど、郷頭に積極的な評価をする研究が出ています。

こうした近年の研究や私の研究成果を踏まえると、「郷頭は徐々に不要なものになっていく」という従来の理解は、決して十分ではないと言えます。郷頭については、制度上の職務だけで検討するのではなく、職務のあるなしにかかわらず果たした役割をあわせて考える必要があると思います。

そこで、対象を郷頭だけではなく「郷頭層」としてその果たした役割を全体として捉えたいと思います。

（領主の変遷）

郷頭層の役割を考える上では、会津藩の特徴も踏まえる必要があります。

一つ目は、芦名氏から保科正之公の入部までの激しい領主変遷があったこと。

二つ目は、会津藩が全国的にみても「小農自立」が遅れた地域であること。

こうした要因があって、保科正之以降、藩政が整ったあとでも、中世以来会津の地であり、その地を熟知している郷頭や郷頭層が活躍せざるをえないことが、その後の郷頭の性格や会津藩の支配体制を決定づけたのではないかと考えられます。

17世紀後半の会津藩領において、「郷頭層」がどのような役割を果たしたかを検証することは、その後の会津藩の郷頭の性格、会津藩の支配や会津藩の社会の特質を考える上でも非常に重要であると考えます。

今回は、高田村で後に郷頭を努める田中重久が後期に記した『重久日記』を中心に考察します。

ここでは、高田村、田中家、『重久日記』の概要をお話します。

（高田村）

まずは、高田村についてです。高田村は現在の会津美里町に位置しており、近世には高田組に所属する会津藩領の村です。

高田村は、下野街道の駅所にあたる交通の要衝であり、六斎市が立つ流通の拠点でもありました。中でも麻が特産物であったといわれています。

免され、後任として田中重久が郷頭に就任しました。

これ以降、田中家は代々郷頭を世襲する家となります。

郷頭に就任する以前の重久については、子孫の田中重好が、近世後期に編纂した記録や記述が残っておりますが、そちらによると町頭という役職であったと伝えられており、重久日記が書かれた当時は町頭であったとも説明されておりますが、これからみていくとおり、重久が当時町頭であったかどうかという点は、疑問をはさむ余地があります。今回は、その点を含め、日記から探りたいと思います。

ただ、中世以来、葦名氏の旧臣としての系譜をもち、後に郷頭に世襲する郷頭層として存在していたことは間違いありません。

（『重久日記』について）

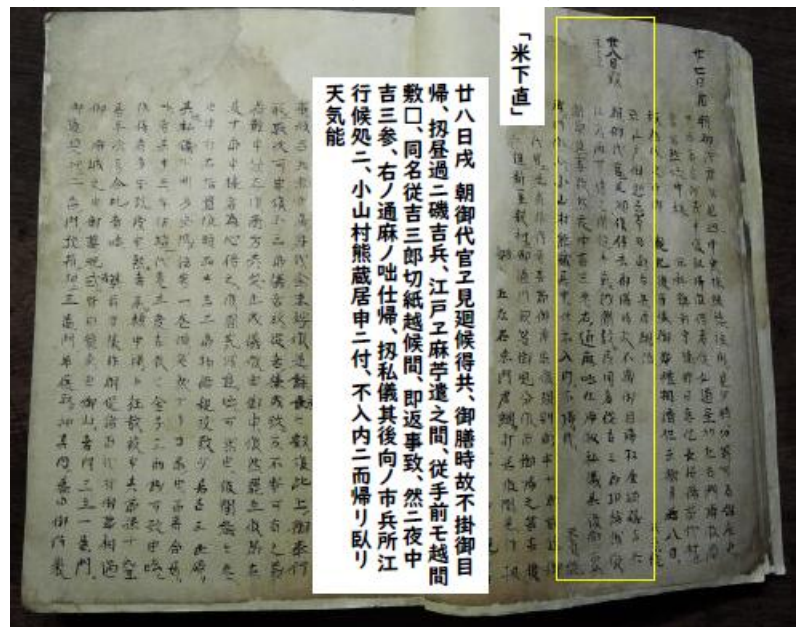
次に『重久日記』についてです。

『重久日記』は、田中家当主、田中重久が延宝元年（1673）から2年（1674）にかけて記した日記です。文政12年（1829）、子孫の田中重好が修復したことで、現在まで残りました。

日記の冒頭に「米下直」とありますが、ここには、米や農産物の相場が記載されています。そして、本文に朝から夜寝るまでの行動が記され、最後に天気

が記されます。行動をみると、朝に代官に見舞いに行ったけれども、食事中だったので会わずに帰ったと記載され、お昼には磯吉兵衛とのやりとりが記載されています。

このように一日が記載され、農作物の流通に関する記録や、代官、村役人とのつながりが見える記録、天気などが幅広く記録されています。



（高田村の郷頭と町頭の職務）

次に、高田村の郷頭と町頭の職務について確認します。

貞享2年に書かれた『貞享風俗帳』に収録された『地下萬定書上帳』の記載から確認します。『地下萬定書上帳』は『重久日記』の10年後に書かれたものなので、『重久日記』と異なる部分もあります。

先に述べたとおり、田中重久は天和三年（1683）に郷頭に就任する前は、町頭を務めていたと伝承されています。

【史料二】の『地下萬定書上帳』に整理されているとおり、町頭には以下の①～⑥までの職務があったとされています。

- ① 年貢取り立ての際、肝煎とともに立ち合い、年貢の支払いが困難な際に郷頭や代官と百姓の仲介役となり対応すること、
- ② 街道筋であることから、用事を町頭が務めること
- ③ 高田村での内証の出入があるときには肝煎とともに裁判すること
- ④ 屋敷や土地の売買や、組を越えた縁組の際の加判、
- ⑤ 郷頭の都合が悪い時には、代理として郡奉行や公事の際の動向も務めること、
- ⑥ 高田村は市場のため、トラブル発生時の裁判を担うこと

【史料三～五】は、郷頭、肝煎、地首の勤書ですが、上下関係などが記載されています。これらをもとに一般的には、代官—郷頭—肝煎—地首のという関係の理解となります。

(『重久日記』からみる代官との関わり)

次に、『重久日記』からみる代官との関わりについてみてみましょう。

以下は「代官の初出」の記述です。

昼時分ニ御代官御着ニ而、即御見廻申上ル、…扨夜中御代官様江見廻、然ニ一座ハ坂内彦三殿・杉原善兵・丹藤太郎兵衛・磯吉三郎・私、四方ノ咄有之、其後酒ヲ被下、鶏一番聆ヲ聞、一同ニ立帰、(延宝元年3月22日)

これは、延宝元年3月22日の「代官の初出」の記述です。

郷頭坂内彦三・杉原善兵・丹藤太郎兵衛・町頭磯吉三郎・町頭重久の5名で夜に代官へ会いに行きました。内容は不明ですが「四方の咄」をしたうえで、そのままお酒を呑んで朝方まで一緒に過ごして親睦を深めている様子がうかがえます。

ここでみられるように、重久は頻繁に代官を見舞っているのが特徴的です。

次にその詳細をみていきます。

代官が若松から高田に出てくると、重久は見舞いにでかけます。

磯吉三申御代官御越之間見舞尤ノ由申ニ付令参上所ニ(延宝元年8月18日)

延宝元年8月18日には、磯吉三郎から代官が来たと聞いて、見舞いに参上しています。代官は高田と若松を頻繁に往復しています。また、代官は高田村に常駐していないことも抑えておきたいと思います。そして、代官が逗留する間は、重久は頻繁に見舞っています。

日記全体では、代官の見舞いについて41件見られます。そのうち食事中などで会えなかったときも15件あり、必ずしも代官に会えたわけではなかったようです。

こうしたことから、代官の行動を全ては把握していないことがうかがえ、職務として代官と行動を共にするというより、私的な関係として見舞っていると思われる。

（代官の下代の仕事を手伝う）

下代左次兵方ヨリ勘定之手傳ニ頼度由使来故参處石川又左居扱從御代官粥ヲ御振舞被成（延宝元年 12 月 15 日）
御代官巳刻比當所ヲ立御帰
但今朝兩日斗夜中ハ勘定手傳ニ下代衆江行所ニ
石河又左所江茶呑ニ被行故私茂茶給ニ右之又左所江行扱一同ニ御代官屋江来
郷村勘定致寅之刻之比帰伏（延宝元年 12 月 17 日）

延宝元年 12 月 15 日には、代官の下代の仕事を手伝っています。

向かった先では代官が酒をふるまっています。延宝元年12月17日には、保科正之公の一周忌のため、若高田を立っています。重久は代官不在の中、代官屋で「郷村勘定」の仕事を手伝っています。19日には代官は戻りますが、手伝ったお礼として20日には、蜜柑をいただいてもいます。

こうしたことから代官との私的な関係で代官所の仕事を手伝っているものと思われます。そして、特に注目したいのは、重久が代官から職務上の指示や命令を受けている場面が日記にはまったく見られないことです。

（村内の動きについて）

次に、村内の動きについてみていきます。

村役人としての役職が確認できる、郷頭の坂内彦三良、下町肝煎の丹藤市良兵、地首の市左右門とのつながりから分析します。

（村内の動き：郷頭とのつながり）

まずは、郷頭とのつながりについてです。

郷頭の坂内彦三良が、町頭の重久よりも上であることは、明確にわかります。坂内家は、保科正之公のときは惣郷頭を務めるなど、田中家と比較しても別格の家柄でした。

延宝元年 5 月 15 日の記述でも、郷頭が組を越えて年貢を支払う算段をつけていたことがわかります。郷頭が重久などと情報を共有していることも伺えます。

また比較として、7月17日の記述から、郷頭へ指示を出すのは代官ではなく郡奉行であって、郡奉行から郷頭への指示を重久も共有していることがわかります。

（村内の動き：肝煎との関係）

次に、肝煎との関係です。

延宝元年12月19日には、重久が肝煎から年貢の支払いを命じられています。12月4日には年貢の確認に行っています。8月5日には肝煎が年貢の確認に若松に行っていましたが、重久はそのことを知らずに肝煎に会いに行っています。

このことから、重久は年貢の業務に直接関わっていないことがわかります。肝煎の業務として年貢徴収が中心で、重久は、肝煎から年貢を指示されて納める一人の百姓でした。

次に、年貢に関わる業務として、頼母子講と無尽というものがあげられます。

これは地域内の郷頭層とともに御年貢頼母子を行うものです。また、年貢とは異なりませんが、近隣の村とともに無尽を行っておりました。

これらのことから、年貢の支払や村の経済を郷頭層が支えていたことがわかります。

年貢から少し脱線しますが、延宝元年7月1日には、もち米の貸し出しについて、肝煎が代官から指示を受けています。重久も同席するものの、代官から肝煎に指示がなされ、重久は関わっていないことがわかります。

ここからも、代官と重久の関係は私的なものであることが分かります。

延宝2年2月6日には、小走の知らせで肝煎の元へ集まり、重久もそれに従って集まっている。糠藁代やタバコ御法度を言い伝えられています。

このことから、重久は、年貢徴収や触書の通達について、重久は一百姓として関わるにすぎないことがわかります。

(村内の動き：地首とのつながり)

次に、地首（じがしら）とのつながりです。

延宝元年5月22日には、地首市左右門からの依頼で、重久が肝煎の案のとおり法度書を清書しています。

延宝元年5月15日や5月29日の記述から、地首の下で人足割や本陣の設置における萱負担の割り当てを行っており、地首においては年貢以外の負担の割符が中心であるように見えます。重久は他の上層農民とともに、地首の仕事を手伝っているにすぎません。

(まとめ)

『重久日記』の分析から、重久が様々な支配を支え、そして地域を支えていたことがわかります。

重久と代官の関係性を整理してみますと、高田村には代官は常駐せず、代官は若松と高田の往来を繰り返していて、重久はその中で、代官を頻繁に見舞い、お酒を通して親睦を深めていました。見舞いに行っても不在であったり、出張で会えないなど、その関係は職務上というよりは、私的な関係というものであり、その関係の延長で手伝いを行っていました。

村内での重久には、肝煎に従い、年貢を納める一百姓としての姿とともに、年貢のたびに頼母子講などを組織したり、近隣の富裕者層を調整したりする姿がありました。

年貢以外では、地首とともに行う姿もみられましたが、重久のことは日記からは読み取れませんでした。

こうしてみると、「重久日記」が書かれた時点では重久は町頭であったとされていますが、日記がかかれた時点では、町頭ではなかったのではないかと思います。

重久の行動は、藩から与えられた役職に基づくものではなく、「郷頭層」としての活動だったのではないかといえるのではないのでしょうか。

(会津藩による藩領への向き合い方と会津藩の支配に対する「郷頭層」の向き合い方)

最後に、これらを踏まえて、会津藩による藩領への向き合い方と会津藩の支配に対する「郷頭層」の向き合い方について整理をしてお話を終えたいと思います。

まず、代官が常駐せず、若松と高田を頻繁に行き来する中で、高田村の支配は郷頭層を中心として元々からある地域の実力者によって支えられて、年貢も彼らの尽力でもってまかされてきました。

藩領と御蔵入領の境という重要な位置にある藩領であっても、「郷頭層」に支配の多くを依存する形になっていた。これは会津藩の藩領の受け入れ方の特徴と考えることもできると思います。

一方で、その会津藩の「郷頭層」の一人であった重久は、たびたび代官を見舞い、私的に業務を手伝っていました。代官との関係を積極的に構築することが、地域におけるみずからの基盤を固めることにつながってのではないのでしょうか。

これから10年後、重久は藩から「郷頭」に任命され、以後、それを世襲し高田村の最有力者として君臨していきます。日記から見える重久の活動は、藩を支えたというだけでなく、代官との私的な関係を構築する中で、家の立場を構築していくしたたかな面を持っていたのかもしれませんが。

以上で、私の話を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

<高野客員教授>

渡邊歩さん、ありがとうございました。

本来ならば、1時間くらい時間をとって聞かねばならないのですが、30分くらいでまとめてお話しただいて申し訳ございませんでした。

皆さん、今日は始めてこの資料を目にした方も多いと思います。漢字も多くて、ついていくのが大変だった方もいらっしゃると思います。

私は、主催者という特権で、先に資料をみることができました。渡邊さんの資料をみて、本当に感激しました。

また、渡邊さんのお話を今日の冒頭に、なぜもってきたのかと言いますと、私たちは、江戸時代の百姓像について、時代劇に描かれる「虐げられた百姓」というイメージがあります。会津藩においてもそういうところがあるのかなあと思うところがあったのですが、実際にはそういうことはないということが、渡邊学芸員のお話でわかりました。

『重久日記』というものを見ていますと、代官と重久の関係は、意外と良好な関係であった。郷頭を筆頭とした農村社会は意外と良好な関係にあったといえる。

そこにあって、その関係を築いたものに、下層の百姓に至っても何らかの役割をもっていただいていると思います。細かいところまで読んでいくと、そうしたことが伝わってきます。

「役割」をもつことで、地域社会に「参加」するということがあったのだと思います。この「参加」は意欲なのか、責任なのかはよくわからないが、この「役割」がネットワークを構築するには大事だったのだと思います。

今は、カタカナでネットワークと言ってしまうのですが、代官と重久の関係、重久と農村社会の関係というものから、ネットワークというものが、緩やかに構築されていたのかなあとも思います。渡邊学芸員、このことについて、何か追加のコメントがあればお願いいたします。

＜渡邊歩学芸員＞

会津藩としては、親藩ということで幕府の言うことも聞かねばならないという状況もあり、なかなか地域のことがよく分からないという状況にもあったのかなあというのが、正直な印象としてあります。その中で、地域の実情を知っている人たちというのがかなり大事なのかなと思っております。

その一人が、重久だったと思います。重久は地域を支えつつ、代官との関係性を築きながら地域での力を築いていきました。一言で言うのは大変難しいのですが、自分の家の利益になることもしつつ、代官との関係性の中で得られたものを地域の役に立てていったのだと思います。

＜高野客員教授＞

ありがとうございます。

冒頭、「補完性の理論」の話もしました。地域のことは、まずは地域に住む私たちが決めて行くんだというお話をしましたけれども、渡邊学芸員の報告から、当時の会津藩としても、地域の実情というのをとても大事にしていたということもいえると思います。地域のことをしっかりと把握した上で藩政をおこなうということで、郷頭層との関係性を大事にしながら、地域のことを理解していったとも言えると思います。

私たちが今、暮らしている現代と、そう違わないともいえますね。

原点は、地域の実情をどう把握するか。そしてそれをどう反映していくかというところにあると思いました。

現代において、地域社会の結びつきの希薄さが問題視されるようになり、その希薄の度合いが加速しています。住民参加を促す際に、何らかの「役割」を担ってもらうことが、手段として有効なのではないかと思います。地域社会の結びつきが強かった昭和50年代頃までは、地域での役割が何かしらありました。今は、何の役割を持たない人がほとんどであります。現代の地域社会の中で役割を持たなくなった住民が多くなったこともこれまでの経過があります。その経過を再度たどりながら、住民参加における役割を再考することを、渡邊歩さんの研究発表から私（高野）は強く感じました。

私自身、今は福祉の業界にも身をおきます。そこは、「共生」がキーワードです。「共生」する社会を築くために、参加者が何らかの役割をもつことが、参加意欲をもたらすし、持続するということがあります。江戸時代という中であってもそうであったということから、共生や協働をしていくために必要な「役割」を再考していくことが大事だなあと感じました。

大変長らくお待たせしました。会津美里町健康ふくし課長の渡部朋宏さんからお話をいただきましたと思います。渡部様は公共政策学で「博士」の学位をとっておられ、また私も福島大学の「ふくしま地域政策研究会」にも参画いただいております。

それでは、渡部さんよろしく願いいたします。



<渡部会津美里町健康ふくし課長>

会津美里町の渡部と申します。よろしくお願いいいたします。

私の方からは「人口減少社会における地方（田舎）の持続可能性」とすごく大きなタイトルとしましたが、ここでは都市部との対比ということで、地方をあえて「田舎」としました。

今日は、会津美里町のお話と日本全体の少し大きな話になると思います。

余談になるのですが、先週の土曜日(10/25)、オアシスのライブで東京に行ってきました。イギリスのロックバンドなのですが、兄弟喧嘩してバンドを解散してしまうんですね。それが、急遽仲直りして、再結成して、そのライブを日本でもやったんです。東京ドームに5万人以上が集まって、すごい一体感で、最高に楽しい時間を過ごさせていただきました。改めて、東京って楽しいなって思いました。

私自身、学生時代は東京に行っていたので、東京に行くと自分の可能性まで広がるような気持ちになります。実際はそんなことないんですけど…。そんな風に思ったりすることもあるって、若い人が、東京や首都圏に行くというのは、ある意味、当然というか、その気持ちはよく分かるなあと思います。

先ほどの基調講演のパネルディスカッションで、地域おこし協力隊の齋藤道子さんから、外に出て行く人を応援したいというお話がありました。そうした首都圏で暮らすことと、人口減少の中で地方で暮らすことをどう両立すればいいのか、ということについて、私の考えていることを話したいと思います。

なお、これから話すことは、私、渡部の個人的な見解で、決して会津美里町の見解ではありませんので、ご了承ください。



（「人口」とは）

今はやりの生成AI、ChatGPTで「人口とは？」と検索してみると「ある地域に住んでいる人の数」と出ました。「人の数」だけでなく「住んでいる」ということが出てきました。この後の話の中で、「住んでいる」「住む」ということが一つのキーワードになります。

「人口減少社会とは？」と尋ねると「人口が減り続けている社会」と出てきました。

そこで、まず「人口とは」を定義してみます。これは、渡部の定義です。人口とは、「一定地域における人間集団（≠住民）の数」かなと思います。これは、必ずしも住民とイコールではない。

ニアイコールであります。

この人間集団を把握するためには、何らかのルールが必要になってきます。そのルールはいくつかありますが、たとえば、「住民基本台帳人口」いわゆる「住基人口」です。あるいは、「国勢調査人口」いわゆる「国調人口」になります。

住基人口については、これは住民とイコールになると思います。実際に自治体に住所を有する人の数、住民基本台帳に記載されている人の数ということになります。

一方で、「国勢調査人口」である「国調人口」については、5年ごとに調査することになりますが、「調査期日にどこに住んでいるか」ということで人口を把握することになります。

この「住基人口」と「国調人口」は必ずしも一致しません。何を言いたいのかといいますと、「人口」と言いますが、それは定義の仕方によって変わるということです。

よく言われます「定住人口」「交流人口」「関係人口」もどういった定義をするかで、違いが出てきますし、これらの人口は必ずしも住んでいる人の数ではありません。また、これらの人口の定義では、「住む」ということがおろそかになっているのではないかと考えていて、それが私の一つの問題意識となっています。

（人口転換理論）

ちょっと固い話になります。「人口転換理論」というのがあります。「人口転換理論」は18世紀後半から20世紀前半までのヨーロッパでの経験をもとに構築された理論であります。

経済社会の発展に伴って、「多産多死⇒多産少子⇒少産少子」という流れがあります。

多産多死は、その名のとおり、出生率も死亡率も高い水準です。いわゆる伝統的な農村社会がこういった「多産多死」の状態にあてはまります。人口増加の変動は大きいけれども、人口増加率はそれほど大きくない。

これが、多産少子となりますと、出生率は依然として高いけれども、都市化や工業化が進んで、公衆衛生等の医療が進むことによって、死亡率が低下していきます。その結果として、出生率は、高水準のまま維持されて、人口増加がもたらされることになります。

その次に小産少子になるというわけです。小産少子では出生率も死亡率も急速に低下していくことで、人口の増加は低水準になります。

これまでは、いわゆる人口転換後の少産少子の時代においては、出生率と死亡率は均衡を取り戻して、低い水準である程度落ち着くとされていました。

ところが、日本ではどうなるかといいますと、日本の出生率は人口維持に必要な水準をはるかに下回っているということになります。

世代を超えて人口を維持するために必要な、女性1人当たりの平均出生率を人口置換水準と言いますが、これが2019年の段階で2.07になり、現在は1.1になりました。こういった状況を踏まえると、日本では超人口減少・超少子高齢化社会の到来が現実になったといわれるところです。

このグラフは、国立社会保障・人口問題研究所の資料を基にして国交省で作成したものです。

鎌倉時代からどのように人口が変動しているかという資料です。

2004年の1億2,784万人がピークで、その後は減少していきます。2050年には1億人を切って9,515万人になり、そのときの高齢化率は約40%になると予想されています。

これは、あくまでも中位の推計なので、おそらくもっと厳しい数字になるのかなと思います。

ここで、改めてこの資料を見ますと、明治期以降のカーブがちょっと特別なのではないかという風にも思います。実際のところ、明治維新以降さらに1970年代の初頭くらいまでは人口増加が大きな問題になっていました。よって、楽観的に考えれば、人口減少は、過去に戻るだけであって、実はそんなに悲観しなくても良いのではないかという意見もないことはないのかなということです。

ただし、時代背景も違いますし、人口構成は当然変わってきます。少子高齢化については、先ほど申し上げたとおり、世界的にみても大きな課題として、とらえるべきと思っています。

（「住民」の定義）

さて、少し硬い話が続きますが、重要な点なので、もう少しお付き合いいただきたいと思います。

「住民の定義」になります。住民については、地方自治法第5条で「普通地方公共団体の区域は、従来の区域による」と「区域」が定められ、地方自治法第10条で、市町村の区域内に「住所」を有する者は、当該市町村及びこれを包括する都道府県の「住民」とするとなっています。

法律上の建前としては、まず「区域」があって、その区域に「住所」があるというところに注目していただきたいと思います。日本国内については、全ての区域が、いずれかの市町村に属していますので、「住所」を有していれば、どこかの自治体の「住民」になっているということになります。

さらにその住民の権利と義務についてもやはり法律の中で、「住民は、法律の定めるところにより、その属する普通地方公共団体の役務の提供をひとしく受ける権利を有し、その負担を分任する義務を負う。」と定められております。

ちなみに、若干余談になるかもしれませんが、1888年の市制町村制では「住居」が「住民」の要件となっておりました。

少し戻りまして、「その『住所』って何なの？」という、実は規定がありません。よって、これは民法の規定を使うこととなります。民法第22条に、「各人の生活の本拠をその者の住所とする」とあります。つまり、その区域に住むという事実があって、生活の本拠があるところの市町村の住民になるということです。

住民基本台帳法第4条では「住民の住所に関する法令の規定は、地方自治法第10条第1項に規定する住民の住所と異なる意義の住所を定めるものと解釈してはならない」とあります。

（民法における「住所」）

ここで、民法の住所についてもちょっとみていきたいと思います。

民法における住所は1個なのか、複数なのかという話をしたいと思います。

民法制定以来大正末期頃までは単一説が通説的見解でした。それが、昭和に入ってから、学説は次第に複数説を提唱するようになり、今日では複数説が通説になっています。

要するに、民法上は「住所」は複数あるということです。今日の重層的・多面的に複雑な生活関係の下では、生活の中心は複数ありうるのものであって、問題となった法律関係につき最も深い関係のある場所をもって住所とすべきであるということになります。つまり、私法の世界では、「住所」は複数あるというのが通説となっています。

一方で、公職選挙法や自治体などの公的な国民関係という意味での公法については、住所については民法上の住所と一致するか否かに関わりなく、基本的には1つというようにされており

（二重の住民登録論）

もう少し違う視点からもみていきたいと思います。

今井照（元福島大学教授）による『二重の住民登録』論がありました。これは、東京電力（株）福島第一原子力発電所の事故に伴う避難者に対するの措置として、提唱されていたものになります。

原発事故の当初は、とにかく避難する、とにかく遠くに避難するということが優先されました。原発の避難指示が解除されるまでは、多くの人たちが避難先に住んでいながら避難元に住所を置いたままだったということです。

実際は、避難指示解除後も避難先で生活していても、未だに住所は避難元に置いていらっしゃる方が多いのです。

これに対して、国の対策としては原発避難者特例法という法律を作りまして、住所がなくても避難先の自治体で、住民サービスを受けられるという仕組みを作ったんですが、現実的には様々な混乱が生じており、今でも生じているという状況にあります。

そうした現状を踏まえ、今井先生は、この原発事故の発生当初にこういった二重の住民登録制度が必要なのではないかという話をしておりました。

大きく3点あげられます。

1点目としては、「帰還」でも「移住」でもなく、いずれ帰るが現在は避難を続けるという「避難継続（将来帰還・待避）」という『第3の道』への対応です。

2点目としては、避難先と避難元での双方において市民としての権利と義務（シチズン

シップ)を保証すること。

3点目としては、土地の括りと直接的な関係をもたない人の括りを基にしたバーチャルな自治体の可能性です。

バーチャルな自治体とは、なかなかイメージしにくいと思います。元々区域とは何なのか、自治体に区域が必要なのか、という根本的な問いになります。

この根拠になるのが、江戸時代の藩政村が空間的な連担性と関係なく、既存の統治関係に紐付けられた「飛び地」として存在していた歴史的事実が根拠になってきます。江戸時代には「飛び地」があつて、自治体に所属していなかった土地があつたということです。

(村の姿)

「村の姿」を見ていきます。これは今井先生の本に書かれていますが、元々は今井先生の考えの基になった荒木田岳先生(福島大学教授)のお考えで、狩猟や農耕など、人間が生きていくために集団を組んだのが村の始まりとされています。村と村が交易する場所が「町(都市)」であり、江戸時代は城下町や宿場町として発展しました。

このときの藩、村、町は、住所に本質があるのではなく、統治の体系として「関係の概念」にありました。「関係の概念」とは、村は関係でできている集団の概念であり、土地に村名がついているのではなく、人の集団に村名がついていたのです。したがって、人が住んでいない場所(区域)はどここの村でもなく、土地の区画ではないため、どの村にも属していない国土があつたということになります。こうしたことから、土地の区域を根拠としないバーチャルな自治体というのが考えられるのではないかとということです。

現在、実際にそこに住んでいる人を住民とみなすというような仕組みになっていますが、そもそもは人の集団が村であつた。日本全国がいずれかの自治体に属するというのは、明治以降の話であつて、それを踏まえると非常に重要な視点だと思っています。

なお、この二重の住民登録論については、いろんな形で議論がされました。結論として、国の見解は「認めない」ということになりました。

ここまでが前段の話になります。

(地方創生の課題①)

これまでの歴史的な経過等を踏まえた上で、少し地方創生について、考えてみたいと思います。

各自治体においては、総合戦略に基づき地方創生に向けた様々な工夫をしながら政策展開をしておりますが、人口減少に歯止めがかかった一部の自治体に事例はあるものの、日本全体を見渡した場合、十分な成果が上がっているとは言い難いと思います。今の地方創生の政策は失敗だろうという判断が多いと思うのです。

それはなぜなのだろうかというところを少し考えていきますと、人口減少対策として地方創生を見た場合、日本全体の出生・死亡による自然増減の問題と地域における転入・転出による社会増減の問題を混同していると思います。日本の人口減少という問題を解決する方策と地域の人口減少問題への対応は別次元の課題だと思っています。

そもそも、地方創生とは誰のための地方創生なのだろうかと考えた場合、これは地域住民のためだと思っています。

少子高齢化や人口減少に歯止めをかける施策も重要ではあるが、自治体に求められるのは、地域住民の幸せのため、その生活実態を踏まえ、生活共同体としての集落を起点とした地域のあり方を創生することが、「真の地方創生」と言えるのではないかと思います。

（地方創生の課題②）

さらに、先ほど転入転出の話をしました。日本全体の人口減少が進むなかで、自治体間での「住民獲得競争」を行っても地方創生は実現されないと思います。仮に、ある地域が住民獲得に成功して人口が増加しても、その結果として、当然いずれかの地域の住民は減ることになります。

このジレンマを解決する方法として何かないかと考えた場合に、複数自治体での居住、すなわち「二地域居住」を前提とした制度設計というのを考えられないのかと思います。

（二地域居住に関する動き）

二地域居住にはいろいろな動きがありますが、一例としてNTTのお話をしたいと思います。

NTTでは、ワークインライフ（健康経営）の動きがあって、ワーク（仕事）はライフ（生活）の一部であって、ライフ全体の充実なくしてワークの充実はないとしています。勤務地を「社員の自宅」に設定し、出社は「出張扱い」とし、地方（地元）で働きながら家族と一緒に生活できる仕組みを導入しています。転勤や単身赴任の解消ということです。

この表は、NTTが導入を発表した新たなルールです。

勤務場所については、現行では事業所であったのが、新しいルールでは、自宅になります。

テレワークの手続きについては、現行では、決裁すなわち上司の承認が必要ですが、新ルールではそれもいらない。

出社の扱いについては、現行では通勤になるので通勤費がかかるけれども、新ルールでは出張扱い、すなわち旅費になります。

居住地については、現行では勤務する事業所の周辺になりますが、新ルールでは居住範囲の制限は一切なくなるということになります。

会津美里町はじめ、地方の自治体では、こういった仕組みはまだまだできておりませんが、世の中にはこうした動きがあるということになります。

（地方創生2.0）

こうした世の中の流れの中で、国の動きですが、総理大臣が変わりましたが、石破さんの時には「地方創生」というのが一丁目一番地とされていました。

「地方創生2.0」という形で、力を入れて取り組もうとしていましたが、その中の仕組みの1つとして、「ふるさと住民登録制度」を作ろうとしています。

これは、「関係人口」に着目し、住所地以外の地域に継続的に関わる方々を登録できる制度としています。さらに、国交省の方でも二地域居住プラットフォームというのを立ち上げて二地域居住を進めております。

その住民登録制度をみると、概要がいくつか出ていまして、登録パターンが2つありま

す。

「ベーシック登録（仮称）」というのは、特産品の購入やふるさと納税制度を通じて接点を持つ人が登録します。「プレミアム登録（仮称）」というのは、地域の担い手となるボランティアや都市や地域に複数の生活拠点を持つ二地域居住者が登録します。

さて、この仕組みで「世の中が本当に変わりますか？」ということですが、たぶん変わらないでしょうね。ただ、この制度を提案している政府の有識者会議の委員を務めている高橋博之（株）雨風太陽代表取締役社長は、全国町村会のシンポジウムの中で、「都市と地方を行き来しながら同時並行に生きていくことを、国が国民運動として展開していければ…」と述べていて、制度提案者としては、もっと大きな目的の中で動いているものと考えているのかなあとも思います。

（二地域居住の制度化）

そろそろまとめの方に入りたいと思います。

二地域居住を制度化するという考え方は、2009年に松谷明彦さんが『人口流動の地方再生学』という本を出していて、その中で「旧来の秩序や価値基準から解放された人々が、自分自身の『居場所』を求めて、最も自分らしく過ごせる場所を求めて、毎日、毎週、毎月、毎年、さらにはライフステージごとに、自分がそのときに所属する社会や組織のエリアを離れて、他のエリアを訪ね、他のコミュニティに溶け込んで時間を過ごし、あるいは移住を重ねる、そうした人々の動き」ということを言っています。

こういった動きによって、社会が実質的に拡大していけば、個別の市町村や集落で考えていくよりもはるかに機能を維持させることができるのではないかと思います。限られた人というパイの奪い合いよりも、人口の維持が可能になるというような主張がされていて、その通りだなと実は私も思っています。

これらを踏まえて、二地域居住での自治体のあり方というものを考えてみると、「住民が自ら住みたい複数の場所での生活を制度的に保証し、多様な住民が自治の担い手として様々な地域社会と関わりながら自治体のあるべき姿を見出していくこと」。これがこれから求められる自治体であり、住民のあり方だと思います。

（自治の担い手とは？）

ここで、「自治の担い手」という言葉が出てきましたので、再びChatGPTで検索しました。検索の結果、自治の担い手とは「地域を自分たちの力でより良くしようと動いている人や団体」で「単なる『参加者』ではなく、自分たちで地域の課題を見つけて話し合って行動していく『役割』を担う存在」と出ました。

（二地域居住の課題）

ここで、二地域居住の課題についてまとめておきたいと思います。

まず、一点目ですが、「定義の曖昧さ」ということです。2つの地域の居住を認めるのか、もっと多くの居住を認めるのか、これについては、複数居住の住民の定義に関わってくることとなります。一般的に選挙法の中では3か月要件がありますので、住民になり選挙権をもつには3か月が必要と考えれば、1年は12か月なので4箇所となります。ただ、

二地域居住については、明確な定義付けがされていないので、ここはきちんとした整理が必要ではないかと思います。

2点目はお金の部分ですね。現状で二地域居住をされている方は、正直なところある程度金銭的にも余裕がある方しかできないのかなと思います。例えば、実際そういった検討をされている自治体もありますが、費用面での調整や支援、あるいは二地域居住をしやすいような仕組みというのがまず必要ということになります。

3点目としては時間です。週の勤務時間、地方公務員の場合は週38時間45分ですが、私自身も、平日仕事をしながら土日は農業をやっていますが、これも結構きついです。それで、週の勤務の中で、国は兼業を認める方向で動いていますが、これって現実的には難しいんじゃないかということです。週休3日制の動きがあって、その週の勤務時間の割り振りを変える。要は1日の勤務時間を長くすれば週休3日制ができるという動きもありますけど、それって根本的な解決にはならないし、やっぱり労働法制そのものを変えていかないといけないんじゃないのかなと思います。

4つ目、これが多分最も重要だと思うんですが、そもそも二地域居住のメリットが何なのかという話になります。結局これにつけるかなと思います。個人的な二地域居住に対する価値観とかではなくて、政策的に誘導する必要があるんじゃないかなと思うのです。二地域居住をしてそこでの生活があるのであれば、最低限、住民としての義務を果たす一方で、当然に権利、具体的には選挙権などです。そういったものも付与していくことが必要じゃないかと思います。

かなり難しい話だと思いますが、そもそも これまで経験したことの少ないような少子高齢化、人口減少社会の中で、明治期以降の地方制度の仕組みそのものを大きく変えないとならないと思います。

その前提として、地域社会を維持していくためには、住むことが原点だろうと思います。これを抜きにして、住民とか市町村制、あるいは人口とかいったものを考えても意味がないと思います。

ふるさと納税などもそうなのですが、今の流れは、自治体間の競争をあおって、「自治体が頑張れよ」的な話で、それで何か解決するかと言えば、決して解決にはなっていないです。移住を前提とした都市か、田舎かという選択ではなくて、都市も田舎もという、人口減少社会を踏まえた、こうした考え方もあるとご理解いただけたらと思います。

(まとめ)

これまでいろいろとお話をしてきましたが、結局何を言いたかったのかということになりますと、二地域居住については、人口減少社会における地方の持続可能性の観点から、これは大変有効な政策なんじゃないかなと思っています。しかしながら、言い方は悪いんですけども、ちまちまやるんじゃなくて、国としてしっかりと方向性と責任を持って、覚悟を持って、住民の権利を守り義務を課す。例えば複数自治体における税の按分であったり、二地域居住をやるメリットが明らかになるような仕組みを構築する必要があるんじゃないかということです。そのことは、冒頭に見た地方自治制度の本質や、歴史的な経過を見た時に、決して理不尽な話ではないと思います。

ちょっと時間オーバーしてしまい、また、かなりはしょって説明をしたので、ちょっと

分かりにくい点があったかもしれませんが。参考までにもう少し詳しく、私が書いた『住民論』という本を10冊ほど会場の後ろに置いてありますので、興味のある方は是非持って帰っていただきたいと思います。

これで、私の説明を終わります。

<高野客員教授>

渡部さん、どうもありがとうございました。

只今ご紹介がありましたように、今、渡部さんの著書『住民論』が会場の後ろにあります。皆さんにご提供いただけるということです。限定10冊ということですので、ご興味のある方は、是非お持ち帰りください。

只今、渡部さんからお話しいただきましたことに、少しコメントしたいと思います。

私の進行が悪くて申し訳ございません。時間的に推していますので、16時45分には、全て終わりたいと思います。さらにお聞きになりたい方は、是非交流会にご参加いただきまして、渡邊学芸員と渡部課長と意見交換していただきたいと思います。

それでは、時間がありませんので、若干のコメントに留めたいと思います。

渡部さん、スライド9を開いていただけないでしょうか。スライド9のところに「関係の概念」ということがあったと思います。ここは今井先生と荒木田先生の論理ということでもご紹介いただきましたが、実は、哲学者で有名な、内山節（うちやまたかし）さんも同じようなことを言っています。

内山さんによれば、哲学的な言い方ですけれども「地域とは関係の集積によってつくられた時空である」と言っています。

「関係」「集積」と「時空」ですね。この「時空」ということは時間と空間そして関係性というところなので、まさにこれがコミュニティだと思うんですね。時間と空間と関係があるところはコミュニティである。そこが渡邊学芸員さんから説明があった江戸時代の高田村という農村社会においても「時間」と「空間」と「関係性」があったというところですし、今井先生と荒木田先生の「関係の概念」というところにもつがるのではないかとこのスライドを見て思いました。

そこで、このことはバーチャルな領域においても当然この「時間」「空間」「関係」というところが成立つんだと思います。前のスライド8にも関係してくるかなと思います。

他のコメントですが、スライド10にある地方創生について、渡部さんは「政策として失敗だ」と言われていましたが、私もそうだと思います。

なぜかというところ、地方創生の目的は、「地方の人口減少対策」と「東京一局集中の是正」ということでした。そうしますと、人口構成をどう見ているかということになります。渡部さんの資料のグラフにもありましたように、これから人口はどんどん減っていくのだけれど、国が進めるこの地方創生の政策というのは、「日本の人口を1億人に戻す」というところを想定して作ってる政策なんですね。よって、そもそもそこに無理があるんじゃないかということが前提にありますことを申し添えておきます。

最後のコメントとしては、スライド14に「ふるさと住民登録制度」というのがあります。

先進的に取り組んでいる自治体が福島県にもあります。飯舘村です。今年（令和7年）7月25日の福島民友新聞によりますと、飯舘村では「ふるさと住民票」という名称をつけ

た制度として行っております。今年の6月に登録者数が1,081人になったとのこと。内訳は、県内が385人、県外が696人で、3分の2が県外者の登録です。さらに県外者の内訳をみますと、東京からが182人で、宮城県からも122人という状況です。この制度は、東京などからは注目される制度なんだと思います。しかし、渡部さんも難しいのではないかとコメントされましたけれども、新聞でも「継続性の課題が見えてきた」と報じられています。これらの方々が、まちづくりに継続して関わる人はそれほど多くないという実態があります。この継続性をどう担保していくかというのがこのふるさと住民登録制度の難しさなのではないかということです。

以上私からコメントです。

渡部さん、何かコメントありますか。

<渡部課長>

先ほど、「ふるさと住民登録制度」について、かなり否定的な話をしましたが、実際には工夫しながらしっかりやっている自治体もあります。一概に全てを否定するわけではありません。これはこれでうまく機能させようと頑張っている自治体もありますので、そのことまで否定するものじゃなくて、制度全体の話として、根本的な問題が解決できるのかどうかという問題提起だにご理解いただきたいと思います。

<高野客員教授>

そうですね。誤解のないように私も申し添えます。

時間が足りないので、先程は課題のお話だけになって、誤解をされたなら申し訳ないです。飯舘村さんの例では新聞報道でもその効果や狙いについて、「村との関わりを持つ人を増やしてにぎわいの創出につなげる」ことをあげていました。つまり、登録者との関係性をどう築いていくかが大事なのだと思います。

皆さん、今日は時間が足りなくなって、申し訳ございませんでした。

ここで、第2分科会を終了したいと思います。

最後に、渡邊学芸員、渡部課長に感謝の拍手をお願いします。

(おことわり)

会場から2つ質問をいただきましたが、質問者から公表について同意を得ておりませんので、報告書からは省かせていただきました。

交流会

講師を囲んで活発な意見交換



特別企画

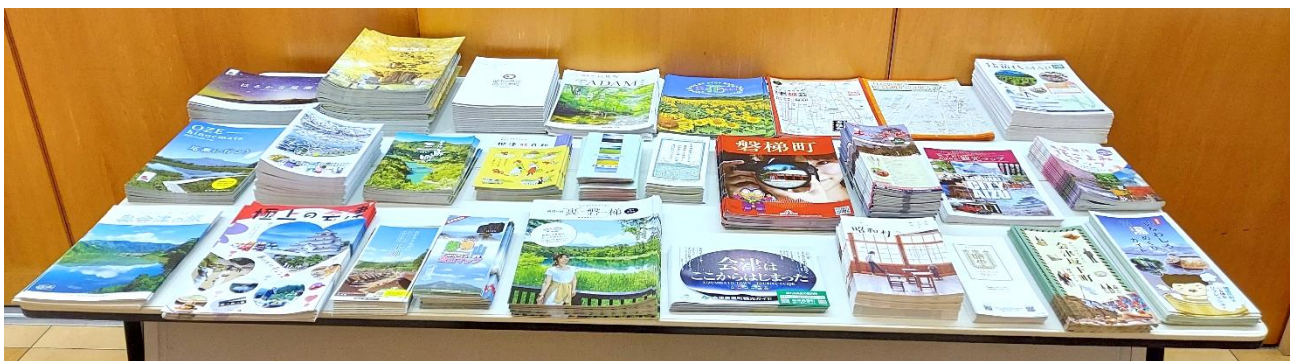
会津の福島県公式イメージポスター「来て。」集結

<会場：ロビー>



会津17市町村の観光パンフ勢ぞろい

<会場：ロビー>



新しい地域資源開発

福島県立博物館とのコラボ 「小彼岸桜のはちみつ」



■ 小彼岸桜について

福島県立博物館にある「小彼岸桜」は、会津松平家の祖、保科正之公ゆかりの桜です。

上記写真のはちみつは、この福島県立博物館で咲き誇る「小彼岸桜」からとったハチミツ100%のもので、「新しい地域資源」といえましょう。



保科正之公は、第2代将軍徳川秀忠の子、すなわち徳川家康の孫にあたり、信濃国高遠藩藩主、出羽国山形藩藩主を経て、陸奥国会津藩藩主となりました。

小彼岸桜は長野県の天然記念物に指定されています。

福島県立博物館の敷地には36本の小彼岸桜があります。福島県立博物館は昭和61年に完成しましたが、博物館建設にあたり、当時の松平勇雄福島県知事が保科正之公ゆかりの高遠小彼岸桜を熱望し、長野県高遠町（現伊那市）より寄贈された桜です。

淡いピンク色のとても美しい桜で、その美しさには秘密があります。博物館整備中の昭和59年、福島県の担当技師は、小彼岸桜の名所である「高遠城址公園」を調査したところ、その美しさの秘密は、この公園の土壌が非常に肥沃であることに気づきました。よって、福島県立博物館の植栽予定地をこの城址公園と同等以上の土壌にしてから小彼岸桜の寄贈を受けたのです。

ゆえに、今も美しく咲き誇っております。時代を超えた会津の誇りの一つです。

マスコミ報道

■福島民報 2025年10月24日朝刊

福島民報 2025年(令和)

美里の可能性を考えよう

来月1日 パネル討論や分科会
会津塾

会津地域文化芸術フォーラム主催の「会津塾2025 in 会津美里」は11月1日午後1時15分から、会津美里町複合文化施設しげんホールで開かれる。基調講演や分科会を通して町の魅力と可能性を考える。参加無料。

基調講演では、町合併20周年の節目に合わせ、農業や会津本郷焼などに携わる町域おこし協力隊員4人が「会津美里と会津の魅力と未来」をテーマにパネルディスカッションを行う。

午後3時ごろからは2つの分科会を開く。第1分科会は「会津美里町と会津の民俗芸能」と題し、NPO法人「民俗芸能を継承するふくしまの会」理事長の懸田弘訓さんらが講師を務める。第2分科会は「人口減少下だからこそ挑戦する会津美里と会津の住民自治」をテーマに、垣見隆禎福島大行政政策学類教授らが意見を交わす。

午後4時50分からは交流会を催す。参加費500円。

会津塾への参加は事前申し込みが必要。フォーラムのウェブサイトに、専用QRコードなどから申し込む。フォーラムの高野武彦代表理事と会津文化芸術振興地域おこし協力隊員の大竹祥子さんが参加を呼びかけている。

「会津塾」参加申し込みQRコード



■福島民報 2025年11月3日朝刊

福島民報 (月曜日)

美里の未来を考える

文化芸術フォーラム 基調講演や分科会

会津地域文化芸術フォーラムの「会津塾2025 in 会津美里」は1日、会津美里町の複合文化施設しげんホールで開かれた。基調講演や分科会を通して、町の魅力と未来への可能性を考えたい。

基調講演では町合併20周年を記念し、農業や会津本郷焼、地域振興に携わる町域おこし協力隊員4人と高野武彦同フォーラム代表理事が登壇した。「会津美里と会津の魅力と未来」をテーマに、協力隊になった経緯や町の誇り、課題などを話した。

第1分科会では「会津美里町と会津の民俗芸能」と題し、NPO法人民俗芸能を継承するふくしまの会の懸田弘訓理事長らがパネリストを務めた。第2分科会は「人口減少下だからこそ挑戦する会津美里と会津の住民自治」をテーマに、

垣見隆禎福島大行政政策学類教授らが地域振興への方策を探った。



地域活性化へ
1日に会津塾
美里
会津地域文化芸術フォー
ラムは11月1日、会津美里



会場を呼びかける高野
代表理事(左)、大竹さん

申し込みフォーム
につながるQRコ
ード

町のじげんホールで「会津塾」を開く。同町の地域おこし協力隊の活動に焦点を当て、会津地域全体の活性化に向けたヒントを探る。基調講演では「地域おこし協力隊がみる 会津美里と会津の魅力と未来」と題し、同町の地域おこし協力隊4人が登壇。高野武彦代表理事をコーディネーターに、経験などを話し合う。

その後、二つの分科会に分かれ、会津の民俗芸能の在り方、人口減少対策などについて意見を共有する。高野代表理事と会津文化芸術振興地域おこし協力隊の大竹祥子さんは「会津をより輝く場所にするための糸口が見つかる。ぜひ会場してほしい」とPRする。時間は午後1時15分～同5時半。入場無料。交流会(午後4時50分～同5時半)は参加費500円。事前の申し込みが必要で、専用フォームから申し込む。

ご支援・ご協力いただいている皆様

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラムは、会津地域17市町村および会津地域の企業・団体の皆様のお力添えを賜りながら活動しています。

特に、以下の市町村および企業団体の皆様には、会員として力強く御支援いただいております。

■ 自治体の皆様（順不同）

会津若松市 喜多方市 湯川村 会津坂下町 柳津町 三島町
金山町 昭和村 会津美里町 磐梯町 北塩原村

■ 企業・団体の皆様（順不同）

会津若松商工会議所	会津喜多方商工会議所
奥会津地域づくり協同組合	福島県中小企業家同友会
会津商工信用組合	一般財団法人 竹田健康財団
株式会社保志	株式会社トコム
株式会社リオン・ドールコーポレーション	
会津酒造株式会社	株式会社プロジェクト会津

『会津塾 2025in 会津美里 報告書』

2026（令和8）年3月

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム

代表理事

高野 武彦

（国立大学法人福島大学 行政政策学類 客員教授）

（社会福祉法人福島県社会福祉協議会 副会長）

（一般社団法人福島県視覚障がい者協力会 会長）

理事兼事務局長 山中 宏行

（株式会社プロジェクト会津 代表取締役社長）

アドバイザー

川 延安直

（元福島県立博物館副館長）

会津文化芸術振興地域おこし協力隊

大竹 祥子